# ジグザグ

千紫紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジグザグ

【Ｎコード】
Ｎ４２０６Ｃ

【作者名】
千紫紅

【あらすじ】
波乱万丈人生を歩んできた主人公・有園咲禾。そんな彼女に新たな問題発生。前向き、時々横向き、斜め向き。長い人生ジグザグしても進みます。さてはてどうなる？どう歩く？

## 第1話　「人生色々あるのは分かりますが・・・」

現代の日本人の寿命は大体８０ちょいくらいらしいデス。
あ、これ男と女じゃ大分誤差があるからね。
まぁ統計を見ると男の方が５～６年短命なんだけど、皆さん酒と煙草には気をつけよーね。
後、メタボリック症群・・・不慮の事故は諦めて下さい。

つまるところ何が言いたいのかって言うと・・・結構長生きなんですよ、人間は。だから８０年の間に色々なことが起こるわけで、多かれ少なかれ波があるんだよね。
いや、こんな事１６年しか生きてない小娘に説かれたくないって言うのは分かりマスよ？

でも、ねぇ？

波があるって自分で言いましたケド・・・。
ちょっとコレには唖然、呆然。
確かにあたし、１６年しか生きていません。
計算すれば平均寿命の５分の１くらいしか生きていませんヨ？

これまでもまぁまぁ大変な目に遭ってきて、人生何が起こるか分からんのだなぁ～とか、あそこの雑草は茹でればイケル。とか、そんな教訓や知識を身に付けて来ましたがね、今回の件はさすがのあたしも吃驚だよ。本当に、マジで。（アレ？しまった同じ意味か）

どうやら結構混乱しているみたいですよー。

さてはて、バイトから帰って来てみれば家――と言っても借家でいつ壊れるのかって程オンボロの≪花坂壮≫――が跡形もなく綺麗さっぱりなくなっていたのです。あはははは。
コレってマジック？特大イリュージョンですか。

つか真面目に考えてみても、どーやって一日で壊したんでしょうか？いくらオンボロだったからって驚異的スピードすぎるでしょうよ？果たしてここの住人たちは無事なのか？
もしや花坂壮とともにお空の星に・・・あり得る。
挨拶を交わす程度の付き合いだったけど・・・骨くらいなら拾っても良かったのに・・・墓は無理だけど。

――と、過ぎてしまったことを考えていても、寝床が降って湧いてくるわけでもなし・・・これからどうするのかが大事だよね？
幸い今は春で、野宿しても凍え死ぬことは無いし、理由は違えど、野宿なんか沢山しているからねー。もうプロの域だから安心だよ？
（なにが。

そうと決まればと、あたしは鞄から財布を取り出す。
所持金１０５２円――上等じゃないか。
コツコツ貯めていた貯金もあるし≪人生何があるか分からない≫を教訓としているあたしは、キャッシュカードも通帳も印鑑だって肌身離さず持っている。

フフフ、抜かりは無いぞー。

真夜中、道路の真ん中に突っ立って含み笑いをしている自分。
あー不気味ですよね、気持ち悪いですよね、スミマセン。

そんじゃ早速、公園に行って寝床調達といきましょーか。
あたしってばここら辺の野宿に最適な公園は、全てリサーチ済みだからさ～。自慢にならないけどね！こうやって簡単に野宿といっているけれど、ホームレスな方々にだって領分というものがちゃんとあって、新参者が易々と温かいダンボールハウスに入れるわけがないんだよねぇ。警察や公園を利用する住民の方々の目もあるし・・・。だからこそ一つの公園に留まるのではなく、複数の公園を利用する必要があるわけで。日々の公園リサーチは無駄じゃなかったぜ！！――――ということなのです。

ボロでもガタでも良いから安い物件が見つかるまでの間なので、どうか警察には補導されませんように。

ここから一番近い公園を目指して歩きながら、ふと、夜の静けさに身を竦める。

「・・・明日は、どうなるんだろーね・・・」

夜闇に紛れて呟いたちょっと弱気な発言は、誰も聞いていない。
それでいい。それがいい。
こんな日があるから、あたしは生きてやろうって思うのだろう。
よーし。明日も明後日も楽しく生きてやろーじゃないか！
何故か喧嘩腰になりながら――あぁ、相手がいないからあたし痛い子じゃないか・・・もしくは変人ですか・・・。

はい、そんなこんなで今日という日も終わるのです。

## 第1話　「人生色々あるのは分かりますが・・・」（後書き）

読んで下さって有難う御座います！

## 第2話　「尾行されている自分は至ってまとも」

どんな事があっても朝は来ます。
そう、例えどこかで大きなテロが起ころうが、大統領が暗殺されようが、そんなことでこの大地は、地球は、揺らがない。
まぁ、最近は温暖化とかで、人間が自分達で自分の首を絞めている事態になっていて、地球も苦労してマスけどね。
そんなだから、あたしみたいな小市民一人に何が起ころうが、地球どころか新聞一面も飾れないわけでして（まぁ惨殺事件ならイケルか？）何が言いたいのかと申しますと、昨日のことは全く大した事じゃないって事ですよ。まぁ、貴重な体験でした。
そう、昨日のことはもう過去で、今は今日と言う日を如何に楽しく生きるかってことが重要。

「んー、顔洗わないと・・・」
光り輝く太陽に起されたあたしは、水のみ場へと直行。
あ、因みにベンチで寝た。学校の制服が皺にならないように座ったまま・・・コレ数少ないあたしの特技だから良く覚えとけぃ！テストに出るかもよ？（出ません
伸びっぱなしの長い黒髪（散髪するお金ナイから）を邪魔だから一つに結って、バシャバシャと顔を洗う。ついでにうがいも忘れない。
冷たい水に完全に目が覚めたあたしは、うーんと伸びをすると、公

園の時計で時間を確認。

「7時、か・・・早いけど学校行こうかなー」

そうすることに決めて、カバンを手に、歩く。
こんなあたしでも一応高校行ってます。
言うまでもなく公立だけど、学校行けるだけでスゲー満足。しかも、友人や先輩方は良い人ばかりで、運動部の部室にあるシャワーを何も言わず貸してくれるのだ。こういう野宿生活になって、銭湯代が浮くのはとても嬉しい。だってね、銭湯を利用するとなると大人ひとり４００円も掛かるんだよ？
それこそ毎日入っていたら馬鹿にならないお金が掛かる――・・・！！
あぁ、しみじみ思います――皆イイ人ばかりであたしはなんて恵まれているのかと！！

――――――んー？あれれのれ～？？？

なんだろうか、この違和感。

今、普通に学校に向かって登校中なんだけど・・・どうやら後をつけられているみたいデス。気のせいかと放っておいたけど、態と複雑極まりない道を歩いているのにピタリと一定の距離を置いてついてくる。
あたし、尾行されるような事したか？
人を後ろから観察するのが好きな変態が知り合いにいたか？

答えはＮＯ。

ここは逃げるべき？

いや、あたしは何も疚しいことはないんだからソレは可笑しい。

じゃあ、話し合い？――「貴方、尾行またはストーカーする人を間違えていますよ」って？

あ～・・・・・・・うん。

え？これでも真面目に考えていますけど？？脳みそフル活用ですけど！？

兎にも角にも、まずは向き合って話し合い・・・かな。

あたしはクルッと向きを変えると、怪しい人影に向かって疾走する。

うー出来るなら貴重なエネルギーを消費したくなかったのに！空きっ腹に朝の運動はきつい――これ、万国共通の常識でしょー。

その人は驚いたように固まっていたけれど、動じずにあたしが来るのを待っていた・・・うん、有り難いよ。どうかそのままでプリーズ、これ以上走ると何かが終わる気がするんだよね、何かが。

やっと謎の人影さんのお顔拝見――あららのら～？？

その人は意外や意外、世間一般で言う、イケメンさんでした。

しかもどー見たって２０歳前後だろうという若さ。あたしもここまでの美形はあまり見たことないっていうくらいの神々しさですよ。

後光が見えるよ、うん。

ま、褒めちぎっておいてなんですが、そんなことはどーでもいいんだよね～？イケメンだろうがタンメンだろうが、他人の後を尾行するなんて行動はメチャクチャ怪しいことですから。もしも探偵や興信所の人間なら見逃そうとは思うけれど、可能性は限りなく０に近い。だって、プロは人間違えなんてしないからさ。

だから――「何者ですか？」

という誰何は可笑しくない、はず。
なのに、目の前のイケメンだけど怪しいお兄さんは笑った。
それもニッコリじゃない、ニヤリ。
口端を吊り上げ、あたしを品定めするかのようにじっくり眺めたあと、その整った顔を歪めて心底見下した感じで吐き捨てた。

「お前があの馬鹿女の娘か」

それで十分。
このお兄さんは、ストーカーでも探偵でも、興信所の人間でも、人間違えをしていたのでもない。≪あの馬鹿女≫の娘である、あたし自身をつけていたのだ。
これで納得がいく・・・イヤ、あんまし良くない方に向かってはいるけれど。

あぁ、それにしてもあの人は――今度は何を仕出かしてくれちゃったんだろーね？
朝っぱらから面倒だ、厄介だぁ～。

「有園咲禾（ありぞのしょうか）だろ・・・返事も出来ないのか」

反応の無いあたしをその長身で見下ろし、嫌悪と蔑みの混じった声で名前を呼ぶ。
あぁ、怒っていらっしゃるー。
あたしが黙っていたのは、この人に対する反抗心からでは全くナイ。
――側の家から漂ってきた味噌汁の香りに、気を取られていたからだ。

どーでしょう、この切実な理由。朝ご飯抜きのあたしにこの香りは拷問デスヨ。あーあたしのお腹がスゲー音で飯くれコールをしちゃったら顰め面したお兄さんはどうするんだろう・・・気になる。

人間離れした秀麗なお顔がポカーンと間の抜けた表情をするのを想像したあたしは猛烈に見たくなった。あぁぁあああもどかしい！！
あたしのお腹鳴らないのか？何で今鳴らないんだっ、いつもシーンと静まり返っている式典なんかで騒ぎ立てるのに！！さぁ、あたしの妄想よ現実になれ！

あたしがじぃっっと自分の腹に念を送っていると、すぐそばから只ならぬ殺気が・・・あ、やべー。さっぱりかっきり忘れてた。
お兄さん、あたしに無視されてキレそうだ。
うん、回避せねば。

「あーはい、あたしが有園咲禾です。初めまして」
「喋るという行為に随分と時間が掛かったな。しっかりと馬鹿女のＤＮＡを受け継いでいるようじゃないか」

おーおー。強烈な皮肉。
遠慮が無いねー、これは嫌いってレベルじゃないね。

もう憎んでいるよ、憎悪だよ。あたしドロドロした感じ苦手なんだけど？
でも・・・怯んでいる時間はないみたい。あちらさんの様子からして長いお話になりそうだ。それならば――サラッと本題行きましょう。だって遅刻の罰掃除は面倒だ。

「はぁ。それで、あたしに何か御用でも？」
「・・・」

ありゃ、あたしの慇懃な態度にカチンときてマスね、お兄さん。
え？態とじゃありませんよ。我らが担任まーちゃんこと赤津昌巳（あかつ まさみ）先生が『有園の敬語は気持ちが全く入ってないから馬鹿にされている気がする・・・』と半泣きで語ってくれマシタから～。その後まーちゃん宥めるのは大変だったよ。うん、直す気ないデス。

「――着いて来い」
「それは無理です」
あたし即答。
あーお兄さんの眉間の皺が、うん、なまじ顔が良いから怖い。
「・・・何故だ」
お、あたしの意見を訊くのか。

う～む。どうやら強行な手段に出るような野蛮人（失礼）ではないらしいデス。いやーあたしもヤクザさんとかじゃ無いと思ってはいたけど・・・一応ね。人は見かけに寄らないし。

なんてったって今まで“あの人”関連でやって来た人達は、血走った危ない目をしながら突然（昼夜問わず）やって来ては有無を言わ

さず「あの女はどこだ！！！」って具合に殴りかかって来るものだから、あたしも平和で穏やかな話し合いが出来なくて・・・うん。仕方なく武力行使させて貰いました。と言っても、やっぱりあの人の子供だから借金の取立てなんかには応じていたけど・・・お陰で貯金も貯まったかと思えば新しい取立て屋に持って行かれるし。あーそう言えば明後日か。ローンにして貰っている分が引き降ろされるの・・・今月はちょっと苦しいなぁ～。

脱線したけど、あたしが何を言いたいのかっていうと、今までやって来た危ないおっさんや、お兄さんたちに比べれば、このイケメンお兄さんは、スゲー常識的でお優しいってこと。
そう考えるとラッキーか？
うーん、ポジティブに行こう。

――おっと、ヤベッ。
お兄さん待たせたまんまだった！

あたしは「穏便に済ませる計画」が台無しにならないように、さも思案に暮れた結果、考えが纏まりましたよー的な雰囲気を漂わせつつ、口を開いた。

「今から――学校がありますから・・・ご用件ならここでお聞きします」
用心に用心を重ねマス。
だって、あたしの母は言わずもがな・・・血縁者であるあたしの事も大嫌いです！憎んでいます！というオーラをバンバン出している人にノコノコ着いて行って、袋叩きに遭いました～じゃ、あんまりじゃないか。

「学校、ね。行く必要は無い」

「ハ？何で？」
あ、素で話しちゃったよ。
おぉっとお兄さん、そんな満足気に邪悪な笑顔を浮かべないで欲しい。
嫌な予感がヒシヒシと伝わってきますよー。

「もう退学届けは出してある。理事長からの印も貰った。よってお前は学校へ行く必要はない」

おー、予感的中。
さり気無く、お兄さんを観察・・・あーどうやら本当の事らしい。
さすがにそんな事になっているとは思っていなかった。
というか、あり得ないじゃないデスかー普通は。なんでこんな事態になったのか情報が少なすぎるしさ～・・・こうなると、もう仕方ないよね。
きっちりはっきり話を着けないと、あたしのハッピーライフに支障が出る。

「取り敢えず、お話を聞く必要があるのは分かりました」
あたしが言うと、お兄さんは軽く頷きさっさと踵を返した。
「――行くぞ」
「はい」

すっげー嫌だけど、着いていくしかないでしょう？

## 第3話　「名乗らなくても分かります」

あー、わたくし有園咲禾。１６歳。
今まで至って普通の貧乏生活を送ってきました。
なので、こんな高級車に乗る日が来るなんて夢でも妄想でも思っていませんでしたよー。

えー、只今の状況ですが、異様に広い車内の中は極寒の地と化しております。
まぁ、あたしはそんな事どうでも良いんで、貰った飲み物をチビチビ飲みつつ、まったりとしているわけですが・・・どうも、このブリザード人間が放って置いてはくれない御様子。

「・・・おい」
あー。これが地の底から響くような声ですかー勉強になるなー。
「オイッ、聞こえてんだろ？」
「あー、すみません。ぼぉっとしていたもので」
「ハッ、やっぱりあの女の娘だな。血統書付きの馬鹿だ」

うん、そういう貴方はやっぱりあのイケメンお兄さんの弟さんだね。
同じような台詞を言っている辺りが。
あ、この弟さんは車内に待機していて、あたしがお兄さんと共に現れた瞬間超メンチ切ってきたツワモノなんですよーアハハ。

しかし・・・なんだかなぁ～。

さっきから嫌な予感が・・・しかも特大級の。

そう。
この外国製の高級車とか、お坊ちゃま学校の制服を着た弟さんとか、よくよく見ればやっぱり高級そうな服を着ているイケメンお兄さん。あぁ、これってもしかしなくてもお金持ち・・・ですよね。

なんで今になってこういう事態になるのかなー。
そう思わないでも無い。この１６年間色々あったけどそれなりに平穏（？）で幸せだったのに。どうしてそっとして置いてはくれないのかと。
でも、これが長い人生の中に起こるほんの一部の出来事なのだから、うん。頑張って乗り越えるしかないよねー。

「チッ」

あたしが悟りを開いた状態でボヤーっとしていると、どこかから舌打ちが。
Ｈｅｙ，弟さん・・・あんたかい！しかも睨んでいる先が問題だよ――原因はあたしですか？
ちょっと待てブラザー、まだ何もしてないぞ！いや、息はしてますが。それさえも気に食わないと？存在自体が許せないと？！
いやはやまったく、最近の若者っていやぁねぇ～。気に食わないことがあればすぐにキレちゃってまぁ、そんなに睨んでもあたしは消えませんヨ？というか、嫌いなら見ない方が精神的にも良いと思うんだけどなぁ？

そんなあたしの思いが通じたのか、弟さんはあたしを睨むのを止めて視線をお兄さんに移した。

「なぁ、兄貴。コイツどうする訳？」
「遊月（ゆづき）急くな。家に着いてからだ」
「はいはい。分かったよ」

おぉ。さすがお兄さん、弟さんの扱いは慣れている。
というか、お兄さんには従順だよね～弟さん・・・じゃなくてユヅキさん。
んー、贅沢を言うのなら出来れば苗字が知りたかった。でも、兄弟間で名字呼びはしないよねぇ。
まー、慌てなくても後々分かるだろうけどさ。

さてさて、やって来ました大豪邸。
運転手さんが開けてくれたドアから降りてみれば・・・スゲー。
なんだコレは。こんなに大きいと迷いそうだ・・・掃除も大変だろう。というか・・・敷地面積広い！あの門からここまで凄い距離ありますが？う～ん、お金持ちだと思っていたけれどここまでとは！

一体こんなお金持ちサマと、どこでどんな繋がりが？――とぐだぐだ考え込んでいるあたしをお兄さんがチラリと一瞥する。どうやら早くしろ、と言っているみたいデス。
はいはい、今行きますよー。

黙々と歩いてゆくお兄さん、弟さん、あたし。
んー素晴らしくピカピカだ。何か掃除の裏技でもあるのかも知れない。
しかも、高そうな花瓶やら絵がそこら中に飾られていますよー。
もう、なんだか違う世界に来たみたいだ。

全てが物珍しくて、目を忙しなく動かしては感嘆のため息を吐いていると、突然前を歩いていた2人が一つの扉の前で立ち止まった。お兄さんがコンコンとノックをすれば「どうぞー」と応える、なんだか暢気な声が聞こえてきた。あたしとしては渋い声の強面な男の人が待ち構えているのかと思っていたんだけどなぁ・・・なんて、勝手な想像を振り払い、視線を巡らしたあたしは思いもよらない人物の姿を目にする。

開かれた扉の中に居た人は、スラリとした長身の美形。
常人では出すことの出来ないであろう、強いオーラ。
人が無視できない、否が応にでも惹き付けられてしまうような・・・
そんな不思議な感覚がある。

その人を見た瞬間、沢山の言葉があたしの中を駆け巡っていったけれど、最終的に辿り着いた答えは「あー・・・思っていた以上に面倒な事になっていそう」だ。
だって、目の前に立つ人は世事に疎いあたしでも知っている程の有名人。

『天宮圭司（あまみや けいし）』

天宮の名は、日本は愚か世界に知れ渡っている。
事実、日本のＴＯＰは間違いなく天宮圭司だ。
３９歳という若さで頂点に立つ男。その実力は数々の大きな事業を成功させてきたことで証明されている。

あー、考えるほど分からん。
そんな人があの人とどんな繋がりがあって、その娘であるあたしが

何故ココに居るのか・・・。

あたしの胸中を知ってか知らずか、天宮さんはニコニコしながらソファに座ることを勧めてくれた。あーなんかあの笑顔に逆らえそうに無いなーと思いつつ、言われるがままにあたし達3人は腰を下ろす。

恐らく天宮さんの息子であろう（雰囲気がそんな感じ）イケメン兄弟はあたしから離れた場所に座ってマス。おー酷い嫌われ様。別に良いけど。

「いやぁ、良く来てくれたね。咲禾ちゃん」
こっちは不必要なほどフレンドリー。
冷たくされるよりはいいけど・・・なんだろうか、この激しい温度差。逆に怖いんですが？

「どうも初めまして、有園咲禾です」
ちゃんと挨拶コレ重要。
マナーは守らねばならんよー。

「あ、そっか。咲禾ちゃんが小さい頃に一度会っているのだけど覚えてないよね。私は天宮圭司――ほら、お前達どうせ自己紹介もしていないんだろう。ちゃんとしなきゃ駄目だぞぉ！」
ちょっと待て。あたし・・・一体いつこんな大物に会った？あたしが小さい頃に何がきっかけで顔を合わせることになったんだ？分からない。本当に覚えていないのか、あたしは。ぐるぐる回るキーワードを必死になって探すけれど見当たらない。

「おい」

声を掛けられて、やっと現実に意識が浮上する。そこには憮然としながらあたしに向き直るお兄さんがいた。そう言えば・・・自己紹介をしてくれるんだっけ???

「天宮志月(あまみやしづき)だ」

うん簡潔。こうなるといっそ清々しい。

「ほら、遊月も」

天宮さんに再度促され、そっぽ向いていた弟さんが舌打ちしながらあたしに向き直る。

「天宮遊月(あまみやゆづき)。お前とは一生宜しくしたくねぇ」

あたしは一度も宜しくとは言ってないんだけど・・・。

まぁ、何を言っても無駄だろうなぁ。

自己紹介も終わって、天宮さんは嘆息しながらも、あたしと向かい合う形でソファに腰を下ろした。

「ごめんね、咲禾ちゃん。2人とも根はいい奴なんだよ?」

「いえ、気にしていませんから」

まーこの2人に嫌われていても別に害も無いし。

「――それより、あたしは何故ここに呼ばれたのでしょうか?」

あたしから切り出してみた。

だって、早く終わらせたかったんですよー。

天宮さんはあたしに安心させるように笑みを深めると、サラリと告げた。

「咲禾ちゃんを引き取ることにしたんだよ」

へぇーそうなんだ・・・ってオイ、どこをどうしてそうなったんだ。
やっぱり、イヤ、予想以上に嫌な展開だ。
この輝く笑顔に負けてはダメだぞ。
このエンジェルスマイリーがあたしの意思を無視していることを忘れるなー。

「えーと、どうしてそういう結論に至ったのかは知りませんが、天宮さんにそんなことをして貰う理由がないですし、全く今の生活に問題はないですから結構です」
ナチュラルに断ってみました。
気紛れなら、これで引き下がってくれるでしょー。という願いを込めつつ。

「それがあるんだよ?咲禾ちゃんが納得する理由」
「なんですか?」
「だって俺、君の叔父だし。つまりは咲禾ちゃんの母親・有園祥子は俺の義理の妹なんですーって事」
「・・・・・義理の妹、ですか」
「そう。俺の父が年甲斐も無く、当時１６だった祥子さんに惚れたらしくてね。その頃は俺も家を出て会社をいくつか経営していたから知った時は驚いたよ・・・父が祥子さんに言い包められて、祥子さんを天宮の養子兼愛人にしているなんてね」

「あー・・・その、すみません」
あの人ならやりそうだ、と思ってしまった。
なんだかなぁー、あの人はどこまで他人様に迷惑を掛ければ気が済

むのかね？過去も未来も現在もってか――はぁ、洒落になっていない。なってないぞぉーこんちくしょぉー。

「咲禾ちゃんが謝ることは無いよ。正直俺はどうでも良かったし、当時は母もそんな父に見切りを付けて、愛人と宜しくやっていたみたいだしね」

「そ、そうなんですか・・・」
何だソレは。主婦大好物の昼ドラですか？
しかし天宮さん、やっぱり様子見で猫被っていたな。
エンジェルスマイルなんてものは嘘っぱち・・・今の冷めた目をした人が本当の天宮圭司なんだ。

こういう人は本当に油断ならない。
あたしは改めて、最悪な状況下にいるのだと再確認。
天宮さんはあたしが警戒を強めた事を感じ取ったのだろう。
ニコリと意味深な笑みを浮かべる天宮さんに、負けじと笑みを作る。

「フフ、問題はここから始まるんだよ・・・咲禾ちゃん」

含んだ物言いが気になるなぁー。
少し、眉間に力が入るのを自覚しながら、あたしは天宮さんを見据えた。今更怖気づくつもりは無いんデスよ？

イケメン兄弟はいつの間にかいなくなっており、そこからはあたしと、天宮圭司・・・一対一の話になった。

でもこれだけは主張させて欲しい。
――お腹減った。

## 第3話　「名乗らなくても分かります」（後書き）

読んで下さって有難う御座います！

## 第４話　「長い人生疲れることもあるでしょう」

「・・・はぁあああ～～」
あたしは大きな溜息を吐く、一生縁の無かったはずの、見るからに高級そうな調度品満載で、その癖上品で広過ぎる部屋を見て、再度溜息を落とす。

「さすがに、ちょっと、ねぇ・・・」

今日は本当に色々あったと思う。
あたしは混乱する頭の中を整理するため、圭司さん（そう呼べと言われた）との対話を繰り返す。

そう、つまり・・・圭司さんの父である孝司さんはあたしの母、祥子に惚れ込み、貢ぎまくった挙句、養子にし、祥子の願いを何でも訊いて上げた結果。天宮の恥、ともすれば自身が失脚するような汚く危ない事業にも手を出して、１年後脳梗塞で死亡。

その後圭司さんが≪仕方なく≫天宮を継ぎ、ボロボロの経営を立て直していくことに・・・。しかし、祥子は孝司が亡くなった後も天宮に居続ける。
祥子如く「私は天宮孝司の子供なのだから当然」らしい。しかも、孝司さんに遺言状を書かせていたらしく、遺産もちゃっかり頂き、孝司さんの葬儀が終わる頃には沢山の男と楽しく過ごしていたという・・・。我が母親ながら最低最悪だ。
しかし圭司さんが祥子を野放しにして置くわけもなく、見事天宮と

縁切りさせ、旧姓の有園に戻った祥子を追い出した。どんな手を使ったのかは命が惜しいから聞けない。

その半年後、圭司さんは智慧（ちえ）さんと結婚。今日はお友達と出掛けていて帰ってくるのは三日後らしい。圭司さんはこの件を話す時、凄く穏やかで優しい表情をしていたから智慧さんのことをとても大切にしているのだと知れた。あたしも思わず穏やかな気持になって、気持ちが弛んだ。それがいけなかったんだ・・・、再び話し出した圭司さんの目は怒りと憎悪が浮かんでいて・・・その不意打ちにあたしは気圧されて息を呑んだ。

「・・・なんて事をしてくれたんだろうね・・・あの人は」

思い出して、あたしも遣り切れない感情が溢れ出す。

散々あの人のことで苦労してきたけど、それでも、仕方ないと思っていたのは紛れも無い、あの人が自分を生んだ母親だからだ。

例え、あの人がどう思っていようが・・・真実親子だから。

それなのに――。

圭司さんは思ったよりも落ち着いた声で語ってくれた。きっと物凄い努力と労力を要したのだろうと思う。

祥子が出て行って一年。圭司さんと智慧さんが結婚して半年、所謂出来ていました結婚（結婚当初知らなかった）だった智慧さんのお腹には長男の志月さんが居たのだ。それを当時引っ掛けておいた天

宮の使用人から伝って知った祥子が自分を追い出した腹いせに、智慧さんの外出中を狙って、階段から突き落としたのだ、しかもお腹を庇いながら落ちた智慧さんの顔を殴り、腹を殴ろうとしたところを、通行人に見咎められ、逃走したらしい。
智慧さんは軽い掠り傷と顔が腫れたこと以外、異常は無く、子供にも影響なかったが、それは本当に奇跡としか言いようが無かったらしい。

――言葉も出なかった。
あたしは何も、言えなかった。
終わったこと、それで済まされるべき事じゃない。
圭司さんの顔を見ることが出来なかった・・・それでも、それは逃げる、ということだから、みっともなく震える身体を叱咤して、向き直った・・・あたしに出来る事といえばこれ位で、情けなさ過ぎて歪みそうになる顔に、奥歯を噛み締めて堪えた。

圭司さんはそんなあたしを待っていてくれて、あたしが頷くと、また話しを再開した。

圭司さんは、警察に報せようとしたらしいが、智慧さんがそれを止めた。大丈夫だから、と笑ったそうだ。圭司さんは渋々了承し、智慧さんの警護を万全に整え、祥子と繋がっていた使用人を即刻クビにしただけなのかは、命が惜しい以下略。
それからは祥子などの妨害にも遭わず、無事に長男・志月さんを出産。それからは穏やかな日々が過ぎ、次男の遊月さんにも恵まれ、祥子の存在を警戒し、警護を整え何事もなく出産。
幸せな日々が過ぎ、天宮は日本のトップとなり世界的にも有名にな

って、テレビや経済新聞、雑誌で天宮の文字を見ない日は無いほどになっていた。事件は今から数年前、志月さんが１５歳、遊月さんが１３歳の時、祥子が２人を誘拐――しようとしたが、返り討ちに遭い、失敗。祥子は何を思ったか、３２歳とは思えない若々しく美しい外見を生かして、志月に迫ったそうだ。しかしそれも失敗。志月と遊月は、現場から逃走し、圭司に嫌悪感露に報告。圭司はソレを訊いて、過去の出来事を全て話した・・・２人の怒り様はさぞ凄まじかったのではないかと、あたしは思う。

そして現在、今日から3日程前に、祥子から脅迫電話があったらしい。如く「昔やっていた違法の数々を世間に暴露してやる」というもの。はっきり言って馬鹿だ～馬鹿すぎる。

だってねぇ、天宮デスよ？日本でトップの天宮。
それを今や一般人の祥子がどうこう出来るわけが無い。
あたしはソレを訊いて呆れを通り越して脱力したさ。
圭司さんは「まぁ普通はそういう反応だよね」と言いながら、あたしを探るように見詰めた。
あー、なんだか取り調べを受けているような気分だったねー。
暫くの沈黙の後「咲禾ちゃんは何も知らないんだね」と呟くように言われれば何を？と思うじゃありませんか。

訊いてみればどうやら祥子――天宮とまでは行かなくとも、国内では知らぬ人はいないであろう大企業≪狭山コンツェルン≫と繋がっているらしい。
狭山は今、結構悪どいことに手を出しているご様子。祥子とは裏の方で知り合ったのだろうと圭司さんは言っていた。
一体あの人は今なにをしているんだ・・・。
思わず気が遠くなりましたヨ。あはは。

祥子がメディアに言っても相手にされないだろうが、狭山コンツェルンが訴えに出れば全く違うシナリオになる。
圭司さんが継いでからの天宮は全くの潔白で、訴えられたとしても先代の孝司さんの時代のことなのだから、と思うが・・・そこは一時的でも養子に入っていた祥子が嘘八百でも千でも並べ立てれば、養子だった事実、そして追い出されたというのも脚色すれば、あっちにとって面白い物語になる。しかも信憑性は十分だ。

あたしはそこまで考えて、じゃあ、自分が何故天宮に居るのかを考える。母と子だから何か情報を持っていると思ったから？あたしを人質に取ればあちらが降伏するとでも？違う、違う。
自分で言うのも何だけど、天宮にとってあたしなど何の価値も無い・・・では、何故あたしは此処に居る？

圭司さんはその疑問に簡潔に答えてくれましたよー。

「用心には用心を。言わば監視だね。君は祥子をどう思っているか知らないが中々にしぶとい女で悪知恵が利く。害虫のようにウロチョロされるのは我慢の限界なんだ――俺、潰すから・・・」

あはは。
滅茶苦茶怖かった。
うん、圭司さんに逆らったらいけないね。
日本は愚か、世界のどこでも生きて行けないよーきっと。

まぁ、ちょっと複雑だけど。
やっぱり罪は自分で償うべきだと思うから・・・圭司さんは優しい人だし、あの人を国外追放するくらいで納まりそうだし、あたしもあの人は長生きすると思うから、大丈夫だろう。

さて、あたしは大人しく監視されるという事になりました。
あたしに異論なんてある筈もない。
身内が阿呆なことしているのだから、むしろ当然。
圭司さんにはコッチで勝手に監視させて貰うことになるから、この家で暮らして欲しいという事、学校はすでに編入届けも出してあり、志月さん（なんと高校3年生）と遊月さん（なんと高校1年生）2人と同じ学校に通う事になりました・・・お金持ちのご子息ご令嬢が通う、小中高エスカレーター式の巨大な≪不知火学園≫・・・しかも早速明日からご登校。あー幸先不安だぜ、このヤロウ。

「あぁーどんな日でも明日はやって来るんだよねー」
一人で呟いて、なんだかちょっと笑えてきた。
おっと、これはヤバイぞぉー。
人間疲れると意味不明な行動をとってしまうものだからねー。

これはさっさと風呂に入って寝るか～。
足を伸ばしても余るくらい大きな風呂に感動しつつ、風呂から上がれば・・・まだ午前10時。あれ？もう一日経ったのかと思ってマシたよ。

「うーん・・・まぁ疲れたし。睡眠とれる時に取っとこう」
頷きつつ、寝室のドアを開けばスゲーでかいベッドがあった。
実はあたし、初めてベッドというもので寝る。

いつも薄い敷布団にペターっとした重い布団だったからなぁ。
そろそろとベッドの上に寝そべってみる。
おぉっ・・・スゲーふかふかだぁ～。
この布団には何が入っているんでしょー？

寝心地の良いベッドに身を委ねてしまえば後は簡単。
もう瞼が重い・・・思ったより疲れていたみたいデス。
霞がかった意識の中で圭司さんの顔が浮かんだ。
監視を了承したあたしに去り際呟いた「覚悟しておくんだよ」という言葉・・・様々な思いが含まれていて・・・あたしはきっと明日から今まで以上の波を乗り越えていかなければいかなくなるのだろうと。朧げにそう思った。

## 第４話　「長い人生疲れることもあるでしょう」（後書き）

読んで下さって有難う御座います！

## 第5話　「庶民、貧民、大貧民」

あたしは所詮、小市民。
ドラマで言えば通行人A。
RPGで言えば村人B。
でも、そういうのだっていいじゃないデスか。
あたしは満足してマスよ？

「皆さんも知っていると思いますが、今日からクラスメイトになる有園さんです」

「――有園咲禾です。どうぞ宜しくお願いします」

しぃーーん。
あぁ、悲しいくらいの非歓迎モード。
拍手なし！笑顔なし！歓迎の言葉もなし！
お坊ちゃんとお嬢様方はシャイなのかしらぁ？っていくらあたしでも、そんな無理やりポジティブ思考には走れません。全力疾走できませぇん！

まぁ・・・この反応、予想の範囲内だから良いんだけどね。
むしろ腐った生卵とかぶつけられなくてよかった！顔面キャッチとか・・・やりそうでヤダ。

内心、ほっとしているあたしに先生が腕をのばしてある生徒を示した。

「えー、有園さんの席は篠田君の隣ですね。篠田君いろいろ教えてあげてください」
「はい。有園さん、こっちだよ」
「――はい」

あたしは篠田クンに軽く挨拶して席に着く。
篠田クンは学級委員長やってそうな感じの人で表面上は穏やかに「宜しく」と返してくれた。
それにしても、チラチラとあたしを見る視線・・・この雰囲気、馴染めそうにないねぇ。見るっていうか品定めというか・・・あんまし良い気分じゃない。

担任の木嶋先生がＨＲを始めるのをぼんやりと眺めつつ、コソコソと交わされている会話は聞き耳を立てずとも聞こえてくる。

「あの子一般人なんだって・・・」
「なんでこの学園にいるのぉ？」
「なんでも、天宮家の使用人で・・・・・」
「えぇ？使用人の分際でこの学園に？」
「うわー身の程を弁えろって感じだよねー」
「ほら、天宮の皆様はお優しいから」
「げぇ～、媚売ってこの学園に入れてもらったんだ」
「最悪～」
「死ねって感じ」
「ウザイよねー」
ｅｔｃ、ｅｔｃ・・・。

おいおい。マジ勘弁してくれー。
なんでそうなるーというか、ご子息ご令嬢のわりにあんたら口悪いなぁ。もっとおほほほ～って世界だと思っていたからプチショックだよー。

まぁ、確かにあたしは天宮家の使用人ということになっていますがね、やっぱりあたしってば異質な存在なんだねー。
あぁ、だから天宮の遠い親戚っていう設定を圭司さんは提案したのか。でもこのお嬢様方の嫉妬と侮蔑の入り混じった刺々しい視線は変わらなかったんじゃないかなぁ？うーん、刺し殺されそうだ。

いやぁ、天宮兄弟人気だねー。

ていうか、親戚の設定が駄目になったのは天宮兄弟が（特に弟）激しく嫌がったからなんだよねー曰く「こいつと少しでもどこかで繋がりがある設定なんて嘘でも吐き気がする！冗談じゃねー！！」らしいですよ？お兄様の方もスゲー嫌そうな顔して、拒絶オーラ放っていたからさー、この案を出してくれた圭司さんに「他じゃ駄目ですか？」と訊いてみたら、圭司さんが難しい顔して考え込んじゃったんだよね。そしたら天宮弟が「コイツなんか使用人でいーんじゃねー？」とあたしを嘲笑いながら言ってくれたので、サラッと「んじゃ、使用人という設定で」と言っちまったわけですよ。

いやーそう言ったら天宮親子揃って驚いていたよー。
使用人設定違和感あるかなぁ？と思っていたら結構上手くいくじゃないか。クラスの方々は勝手に想像して納得してくれたから、楽でいい。まぁ初日にしてスゲー悪者になっちゃったけど。

授業は滞り無く進んだ。
あたしコレでもまぁまぁ成績良かった方だったから、分からない所は無い。まぁ、少しこっちの方が授業の進み具合が早いけど、大したことじゃない。

ふむ。
順調、順調。
現国の授業が終わって、昼休みに入る。

ここには食堂（というよりはお洒落なカフェテラス）や購買（というよりは種類も豊富なちょっとしたお店）があって、皆それぞれ仲の良い友達と連れ立って教室から出て行く。
普通転校生ってものは初め、凄く騒がれるんだけどねー。
なんかあたし、この頃嫌われてばかりかも知れない。
少し、胸の中で冷たい風が通り過ぎるのを感じながら、鞄の中から弁当を取り出す。この学校には食堂とか購買とかあるらしいんだけど、あたしは弁当〜。これにはちょっとしたワケがある。

今朝、圭司さんから突然カードを渡されて、それを好きに使いなさいと言われ・・・即座に突っ返した。
当然だ。そこまでして貰う理由なんて無いからね。
沢山あるわけじゃ無いけどお金だってあるし、第一、あたしの身内――あたしも含めて――迷惑掛けているのにこれ以上迷惑は掛けられないじゃないデスか。うん、だからお弁当。

今日は朝ご飯の残り物を詰めさせて貰ったけど、早速今日からスーパーにでも行って食材を買うつもり・・・うーん、安いのは≪金太郎スーパー≫なんだけど、ここから金太郎に行く道が分からないしな〜どうすっかねぇー。

などなど考えながら、もぐもぐ弁当の中身を平らげていく。
あーウマイ。さすがプロの料理人に作ってもらっただけあるなぁ。
料理教えて貰えないかなー？・・・あぁ、無理か。

今日気が付いたんだけど、どうもね、天宮に居る使用人さん達にもスゲー嫌われているらしい。だって、朝起きてリビングに行ったときのあの空気・・・マジでビビッたぞぉー。
台所・・・貸して貰えないかもしれない・・・。

「ふぅ・・・」
思わず洩れる溜息。
ペットボトルのお茶を飲んで、弁当箱をしまう。

今気が付いたけど、クラスの皆さん、あたしが異様な怪物でもあるかのように見ていらっしゃいます。
なんだぁ？？
視線を辿れば行き着くのは、しまい終わった弁当箱。

コレがどうしたよ？
何か問題でもあるんですかー？
教えてくれー、あたしにはこんな視線を心地良く思う神経などないのだからねー？

「ちょっと貴女」
「はい？」
おぉ、何とも言えないこの雰囲気の中、あたしに話しかけるとは・・・うぉ！美人さんだー！スゲー！！

ほけーっと名も知らぬ美人さんに見惚れていると、なんとも不愉快そうに視線を返してくれた。うぁー敵意剥き出しデスか、そうですか。

「ここは教室なのよ？分かっているの？」
「え？はい。分かりますけど・・・？」
「では、何故貴女はここで食事をしているのかしら？」
「ああ、教室で食事してはいけなかったんですか。すみません」
「全くこれだから一般人は・・・。言って置きますけれど、この学園は貴女のような人間が居ても良い場所では無いのよ？その自覚を持って、この様な無作法で品位の欠ける行動は慎むことね・・・そうだわ、貴女の様な人と同じクラスだからといって他の皆様に同じような人間だと思われたくないの、私達。どう？御分かりかしら？」

「――はい。ご忠告どうも有難う御座いました」
「・・・ここは天宮の皆様の様にお優しくはないわよ・・・」

吐き捨てるように言って、美人さんはお仲間のお嬢様たちの中に入っていった。

えーと。
やっぱり普通の学校とは違う、か。
しかしなぁ、どう違うのか教えてくれるような親しい人は悲しいことにいないんだよねー。

まぁ、いーか。
さっきの美人さんみたいな人がまた丁寧に教えてくれるかも知れないし・・・って、駄目だ。
あたしは天宮の使用人、ということは、あたしの失態は天宮の教育

がなっていない、という面倒なことになっちゃう可能性がある。

うーん、問題は山積みだぁー。

ＨＲが終わった。
ここまで何事もなく、過ごせたよ、一応ね。
昼のような事態になるのを避けるため、一々クラスメイトの言動を備に観察していくことにした。寿司職人じゃないけど、『目で見て盗め』作戦は上手くいっている。

さて、帰るか・・・。
各々に帰っていくクラスメイトたちを見て、鞄の中に新品の教科書を詰める。一気に貰ったから結構な量だ・・・重いぞー。

ここは金持ちが通う学園、だからなのかあたしの様に徒歩通学はいないらしい。お抱えの運転手さんが頭を垂れてお辞儀しているのを当然のように受け取って、車に乗り込んでいく同じ年頃の学生。

キラキラしているっていうか、なんというか・・・。
同じ年頃、同じ制服、それでもあたしはあんな風に振舞えないだろうなぁ〜。いやぁ、お金持ちも大変だなぁ。あんな風に頭下げられて傅かれて・・・堅苦しいことこの上ないねー。

そんなことを考えながら、歩く。

あら？あれ？

「あたし・・・迷っちまいましたか？」
ぽつりと呟いても返ってくるのは沈黙だけ。
あーあ。
もうこの際、探検だ。探検。
歩けば知っている場所に着くかもしれないし。

開き直って、ズンズン足を進めていく。
真っ直ぐの大きな道を、右に曲がってみたり。人一人、通るのがやっとな感じの狭い道をわざと行ってみたり。目的は一応、帰ること。ついでにスーパーなんかも発見できればいいなぁと思って・・・・・いたりしたんですが――あらまぁ、大変。この道は一体どこに続いているんですか？
あはははは。迷子だよ、スーパーハイパーミラクル迷子。この年になって迷子なんて・・・あぁ、目から青春の汗が滴り落ちそうだぜ。

あたしは一縷の望みをかけて辺りを見回してみる。
うっわーー、人っ子ひとりいないのですけど！
住宅街なのに人がいないって、ナニコレ？大規模な嫌がらせ？それとも町内全員参加のかくれんぼ大会でもやっているんですか？！大の大人が童心に戻りきって、白熱したバトルを繰り広げていらっしゃるのですか！！？

悶々と八つ当たり気味の妄想をしていたあたしに、なんだかいろいろと思念の混ざった鋭い視線が突き刺さる――――あれ？真新しいこの感覚は・・・まさか。
あたしは事実を確認するためにチラリと後ろを見やった。
やっぱりだ。尾行されている・・・監視、か。多分朝から監視して

たんだろうけど気が付かなかった。
あっちは仕事。絶対に接触してこないだろうから、あたしから道案内とか頼んじゃダメかなぁ？もう1時間近く歩いているけど全く、ゴールが見えないんだよね。

駄目元で・・・いってみるか・・・。

そうと決まれば話は早い。
あたしはクルッと踵を返して、人影に向かって疾走する。
おぉ、デジャヴ。あたしって2日連続こんなことしているのか・・・
ある意味スゲー。

物陰にいたその人とついに対面。

あらら～。
期待を裏切らない監視役。
スキンヘッドのグラサンお兄さんだよ。
マッチョだマッチョ。どんな鍛え方しているんだろう？
えーい、触っちゃえ。

「――固っ！おぉーコレ位鍛えれば、どんな奴にも勝てそーだ！どうすれば強くなれますかー？トレーニング方法は？腹筋何回やっているの？」
あたしの質問攻めにサングラス越しに見えた鋭い目つきが、一瞬呆気にとられたように見開かれた。

「・・・なんなんだお前は・・・・・」
低い声に若干の苛立ちを含ませているお兄さんはあまり気の長い方ではないらしい。

「あれ？お兄さん監視役じゃないんですか？」
窺うように大きな体を見上げれば、溜息で返された。

「確かに俺はお前の監視役だが・・・」
「それじゃあ、あたしの事知っているでしょ。でもマナーは大事だよねぇ。ごめんなさい。では、改めまして有園咲禾です。宜しくお願いします」
「――それで、なんの用だ」

オー、イッツソークール。
あーあ。やっぱり嫌われている。
しかーし、ここでめげないぞー。あたしはしつこいぞ～。

「えと、お気づきかもしれませんが・・・あたし道に現在進行形で迷っている次第です。道を教えてくれませんか？出来れば安いスーパーなんかも教えてくれると有り難いんですけど・・・」
自分でも図々しいと思うお願いに、お兄さんは眉間にぐぐっと力を入れた。

「――・・・スーパー？そんな所へ行く必要がどこにある」
「あー、あたしお金あんまり持ってないんで、自炊しないと・・・今月厳しいし・・・」
お兄さんの迫力に、ヤクザさんに慣れているあたしでも少しびびる。

「ハッ、誰がそんなことを信じる？下手な嘘は止めろ。道に迷った振りをして、下らない作り話で俺が隙を作るとでも？」
冷たい視線が、あたしを射抜く。あぁ、全く信用されていない。
そりゃそうか・・・と思いつつ、スーパーは諦めることにする。
「そんなこと全然思ってないです。本気で迷子なんですけど・・・道だけでも教えてくれませんか？」

「――チッ。道順、頭の中に叩き込めよ・・・逃げようなんて余計なことは考えずに着いて来い」
「はい。有難う御座います」
瞬間、厭そうに歪んでいたお兄さんの顔が、ハッと驚いたかのように表情をなくしたのをあたしは全く気付かなかった。

きちんと案内してくれるとは・・・相当あたしのこと嫌いなんだろうにこの人、優しいなー。
しかも強い・・・と思う。
あたしなんかの監視役なんて勿体無いね、マジで。
そんなことを、無言の道中で考えているとやっと大きなお屋敷が見えてきましたよ。

巨大な門の前に立ったあたしは、お兄さんの前に回り込んで感謝の思いを込めて礼をする。

「――。さっさと入れ」
素気無く返された。でもその言葉は、あたしの気のせいだとは思うけれど・・・あまり冷たく響くことはなかったような気がする。その感触に嬉しくなってもう一度だけ、今度は緩んだ顔をそのままに喋る。
「案内してくれて有難う御座いました！」
「・・・・・・」

あとはもう、振り返らない。
スキンヘッドなお兄さんは良い人だけれど、他の人たちのようにあまりあたしに良い感情はもっていないだろうからね。不愉快な思いにさせるのは本意じゃないんだ。

よし、目下の目標は取り敢えず・・・もう迷子にはならないぞー！

「只今帰りました」
「お帰り～。遅かったね、どうしたの？」
玄関近くでばったり圭司さんに会う。当然の疑問に正直に答えようと思います・・・高校生にもなって・・・アレでした・・・迷子でした。

「道に迷ってしまって・・・」
「あぁ、道が入り組んでいるからね。大丈夫だった？」
「はい」
苦く笑うあたしに圭司さんがさり気無くフォローを入れてくれた、さすがです。

「――学校は、どうだった？」
和やかな会話の流れだったけれど、恐らく圭司さんが一番聞きたかったことはこの話題なのだろう。雰囲気が変わった。あたしはただ正直に感想を言うしかない。
「えーと、納豆よりもネバネバで、ドリアンの匂いよりもキツイ・・・そんでもって、息苦しい・・・そんな感じでした」

「成る程」
圭司さんは呟くように言うと、思案するように長く綺麗な指を唇に添えた。
うーん。様になっているなぁ・・・と感心しつつ、学園で過ごした一日を改めて振り返ってみる。

なんていうか・・・皆が皆お互いの顔色窺って、いつも緊張しながら行動しているのは見ていて物凄く堅苦しかった。学校っていう一つの世界で成り立ってしまっている上下関係や独特のルール・・・狭い世界で様々な思惑が渦巻いているのを感じた。
表面上は穏やかに過ぎていった一日の中にどこかぎこちないクラスメイトの言動――そんな中、一際目立つ大手企業の御子息・御令嬢の皆々様。

あたしは、庶民どころか貧民・・・否、大貧民だからお金持ち同士の事情なんか全く分からない。それでも・・・もう少し、肩の力を抜いて生きていかないと、いつかパンクしてしまいそうだなぁなんて・・・あたしがこんな事思うのも何様って感じなのは重々承知しているけどねー。昔の自分を見ているようで――あまり思い出したくはない過去が頭の隅にチラつくから、柄にも無く心配だな、と思っている。まっ、これは自分勝手な想いだけどね。

「うん、そうか。ところで咲禾ちゃん・・・ドリアン、食べた事あるの？」
「無いですね」
即答すると、圭司さんは唇を歪めて、堪え切れないとでも言うように噴出した。
「くっ、ははは。咲禾ちゃんは強いね、しかも面白い」
「？――そうですか？」
良く分からなかったけれど、多分圭司さんの表情からするに・・・ドリアン食ったこともねーのに何話の例えに出してンだよコノヤローという感じじゃなかったのでひとまず安心。
「今朝、使用人として学園に編入するって言ったときはどうなるか

と思っていたけど・・・平気な様で良かったよ」
そう言って微笑む圭司さんは、本当にエンジェルスマイリーの異名に相応しい。

会話が途切れたところで、重要な話を思い出した。

「あの圭司さん、アルバイトってしても良いですか？」
監視されている身の上でこんなお願いが通るかと半ば諦めの入った問いに、圭司さんはこちらが拍子抜けするほどあっさりと首を縦に振った。
「構わないけど・・・。お金の事なら心配しなくて良いんだよ？」
本気でそう言ってくれている圭司さんにあたしは真顔になって彼の目を見つめる。

「いえ。寝床も用意してもらって、学校まで行かせて頂いているのにそこまで迷惑掛けられません」

これは見栄や意地、可笑しなプライドなんかじゃない。
ただ、あたしは毎日をしっかりと生きたい・・・それだけ。

「そう言うけど、家は部屋も沢山余っているし、学園だって咲禾ちゃんが成績優秀だから授業料・入学金・その他諸々免除だし、何も負担なんてないんだよ？むしろ、祥子の件で咲禾ちゃんまで巻き込んでしまったのは俺だし」
「それでも自分のことは自分でやる。これ、当然ですから、気を遣って頂かなくて結構です」
笑顔でそう言ったあたしとじぃっっと数秒睨めっこした後、圭司さんは小さく頷いた。
「――そうか・・・うん、分かった。でも、何かあったら言うんだよ？」

「はい。有難う御座います」
「ふぅ・・・咲禾ちゃんと智慧くらいだよ。俺を丸めこむなんて」
そう言って肩を竦める圭司さんが可笑しくてクスクス笑った。

「ほぁー、すげー・・・」
あたしは今、自室にいる。
昨日はこの広い部屋の中をゆっくり見る暇も無かったけれど、さすが天宮。自室には風呂、トイレ、キッチン完備。
う～む、至れり尽くせりとはこのことだよなぁー。

いやー今日は転校初っ端から超悪役になるわ、道に迷うわで、安いスーパーも、新しいバイト先の目星もつかなくて、収穫無しかと思いきや・・・台所という問題はコレで呆気無く解決されたわけですよ。うーん、良かった～。

あーでも、明日の弁当はどうしよーか。
今日、朝ご飯の残りを詰めていた時のあの雰囲気・・・。
というか夕御飯もここで作って食べようかなー。

昨日も圭司さんに言われて天宮一家と食べたけど、なんていうか・・・空気が重かったし、折角の美味しい料理と家族の団欒――その中にいるあたし――台無し。
いやぁ、天宮兄弟はあたしなんか居ないように扱っていたけど、圭司さんが気を遣って話し掛けてきてくれるから、使用人さんたちに

滅茶苦茶睨まれた。そりゃスゲー冷めた視線でしたヨ。凍るかと危惧したくらい、あはは。
あの目は語っていたね、目は口ほどにモノを言う、とはよく言ったもんだねー。嫌悪・憎悪・侮蔑・嘲笑・・・そんな熱くも冷たい視線に晒されても料理はメチャクチャ旨かったなぁ。

でも、さ。
やっぱり、あたしってぶっちゃけ邪魔者・お荷物・役立たず。
それくらいは分かっているからね、これ以上迷惑掛けたくない。
圭司さんがあたしに必要以上に構う事で（夕御飯しかり今日の事しかり）天宮兄弟が不機嫌になっている。
そういうのは、嫌なんだー・・・あたしなんかのせいで、天宮親子の関係がギスギスするのは。

だってさ、たかが1、2日過ごしただけのあたしでも分かる程、天宮一家って、スゲー仲が良いんだよ。
こっちが羨ましくなるほど、お互いを思い合っているっていうか。
まだ圭司さんの奥さんである智慧さんには会ったことはないけど、あたしの部屋は智慧さんが用意してくれたのだそうで、所々に垣間見える温かな空気とさりげない気遣いに、胸が一杯になる。

きっと智慧さんが帰ってきたら、この天宮の家は今まで以上に温かで穏やかな空気が流れるのだと思うんだ。

――そこに、あたしという不協和音・・・。

この家の中にある違和感の正体。
天宮兄弟の不機嫌の原因。
今までの事件の元凶の娘。

あたしには似合わない、広くて機能的で、豪華な部屋。
あたしは知らない、温かく穏やかで、包まれるような優しさ。
あたしが憧れていた、家族。

2日間、そばで見ていて分かった。
あたしが密かに憧れていた夢は手にするどころか、触れる事すら躊躇われる、そんな綺麗な世界だった。

全部分かっていたことだけど。

圭司さんは、あたしを気遣っているように見えるけど、実はそんな事はない。ずっと、観察されているのが分かるから。
あたしってば、長年あまりにデンジャラスな人達と関わってきたから、なんていうか、人の感情とかには敏感なんですよ。一種の自己防衛術かな？

うん。
とどの詰まり、あたしはこの家に居る限り大人しく、空気のように気配を消して過ごす・・・そんなこと位しか出来ないけど、天宮一家にはコレで我慢して貰わなくてはいけない。

圭司さん直々の夕御飯のお誘いを丁重にお断りして、自室に付いた冷蔵庫の中の食材（何から何まで揃ってました）を使って、簡単

な料理を作る・・・あー、こんな高級食材を目の前にしてメニューはチャーハンと野菜スープ（コンソメ味）・・・節約術も思わず駆使してしまう自分・・・なんだか切ないかも。

もぞもぞとフワフワ布団に寝転がれば、途端瞼が重くなる。

これから数ヶ月。
トラブルが降ってきたり、湧いてきたりしませんように・・・。

なんだか嫌な予感に捉われつつ、あたしはお休み3秒の早業で、深い眠りに就いた。

## 第5話　「庶民、貧民、大貧民」（後書き）

拙い文を読んで下さって有難う御座います！

## 第6話　「遅刻はいけません」

お金、というものは生きていく上で必要ですよね？
必要だから、皆汗水垂らして働いているのだと思うのですよ。
しかも、あたしみたいな借金塗れの人間は特にね。

というわけで・・・。
レッツ・バイト探し！

求人雑誌をペラペラ～っと捲って、素早く場所、年齢、時給をチェック。
「むぅー・・・。どうもしっくりこないなぁ～」
確かに時給は高い方が嬉しい・・・うん。
でも時間帯がなぁ～・・・うぅーむ。

あたしは一人唸りながら、求人雑誌を睨む。

貯金はまだ、ある。
それでも、沢山あるわけじゃない。
もうすぐ、ローンにして貰ってやっと払っている借金のお金が通帳から引き下ろされる。

つまり、早急に手を打たねばならんのだよ！

「んんー・・・って！あぁぁ！！！」

ＡＭ８：０３

遅刻する！！！

あたしは素早く立ち上がると、弁当箱を引っ掴んで部屋を飛び出した――と、そこにグッドなタイミングで志月サマサマ（敬ってません）が現れたー・・・避けては通れない道デスか？そうですか。

まぁ、何としても遅刻は御免なので通らせて頂きますが。

あたしが何事も無い風を装って、志月さんに目礼しつつ横を通り過ぎようとする・・・と腕を掴まれマシた。

「・・・送っていってやろうか」

「は？」

「このままじゃ遅刻だが？」

「いえ、大丈夫・・・」

「なわけないだろう。人の厚意は素直に受け取るものだ」

「・・・はぁ・・・」

うーん・・・厚意、ね。

嘘くさい、果てしな～く疑わしい。

つか、嘘だろ！！

はぁ・・・なんで嫌いな相手に突っかかってくるかなー。

あー嫌いだからデスよね・・・あはは。
こっちが避ければ相手が突っかかってくる・・・どうすりゃいいんですかー・・・。

「平岡、出せ」
「はい、畏まりました」

「・・・・・」

今実感した。
志月さんて、高校生なんだよな～。
いやぁ、スーツ姿で会社に出勤していても違和感ないのになー。
高校生――友達とともに笑い合い、時には先生にお叱りを受ける・・・はじける青春――に、似合わねー！

高校生が似合わない高校生って・・・。
なんだか志月さんが可哀想に思えてきましたよ。
いやいや、ブレザーも素敵に着こなしているんだけどさ・・・どこかが噛み合ってない・・・（失礼

まぁ、似合わないと言えばこの現状。
お抱え運転手に、お坊ちゃんな志月さん・・・とあたし。
我ながら場違いだと心底思うのですけれど。
居心地の悪さを流れていく景色で紛らわしているあたしに、志月さんが機会を窺っていたかのようなタイミングで話し掛けてきた。

「――有園祥子から連絡はあったか？」
「無いですよ」
「・・・そうか」
口を開けばこの話題・・・いや、志月さんの口からお天気の話がでてきても困るのだろうけど。

「お前の役目は自分の母親を誘き寄せることだ。天宮を欺く事は出来ない・・・己の身が可愛いなら馬鹿はするなよ」
あたしを視界に入れたくないのだろう。こちらをチラとも見ずに、淡々と釘を刺す。
裏切る気なんか毛頭ない。
でもそんなことを言っても無駄だってことは十分分かっている。
あたしはただ首を縦に振って頷いた。

そんなこんなで遅刻を免れたあたしは教室の扉を開けた。
途端に静まり返るクラス。
悪意の篭った幾数もの目、目、目、目、目。
昨日まで纏まりの無いクラスだと思っていた。
でも、前言撤回。
どうやらあたしという敵を見つけたことで一致団結したらしい。
朝っぱらから臨戦態勢の皆さんとのご対面は予想していませんでしたよー。転校2日目からこの状況、ギネスブック更新ですか？嫌わ

れ者世界新ですか？
あはは・・・１６年間生きて来てこんなにも人の視線を集めたのは
初めてですよ。あーあ、朝ご飯食べてくれば良かった・・・。

## 第6話　「遅刻はいけません」（後書き）

読んでくださって有難う御座います。

## 第7話　「これってお約束な展開ですか？」

取り敢えず、あたしの机や椅子は無事だった。
今のところ何も起きてはいない。
でも何も起こらないっていうのは有り得ない。
あんな目であたしを見ているのだから。
昨日より増した負の感情。
がらりと変わった教室の空気。
突き刺さる視線。
耳を傾けなくても聞こえよがし交わされる会話は届く。

「・・・・・で、志月様に迫ったって」
「遊月様にも・・・・・」
「今日だって、志月様と一緒に登校・・・・」
「使用人の分際で・・・」
「――遊月様が困っていらっしゃると仰って・・・」

おい、おい、おーい！
黙って聞いていれば・・・なんですかーこの突拍子のない噂は。
どこから降って湧いてきたんですかー。
噂の当人吃驚なんですけど。

さっきからあたしが天宮兄弟の弱みを握って誘惑したとか、迫ったとか、財産目当てだとか・・・笑いそうだ。
いや堪えろ、あたし。今殺気立ったこの教室で笑ってみろ、八つ裂き決定だぞ。

己の腹筋を駆使して笑いを引っ込めたあたしは、どうしようかと考えて諦めた。この間3秒も無い。だってねぇ、あたしがなんて言ったって絶対に信じては貰えないし、
あたしに味方なんていないし・・・うぁ～ロンリー・・・。

それより、バイトを探さなくては・・・！
求人雑誌に集まる視線は物珍しさからなのだろうか？視線が熱いぜコンチクショー。
あぁ自分の一挙一足がこんなにも視線を集めるとは。ページを捲ることさえやりにくい！

木嶋先生のＳＨＲが終わり、授業が始まってからもクラスメイトの視線はあたしに釘付けだ。
黒板見ようよ！公式うつそうよ！！親御さんに「このテストの点数はなんザマスか！」とか怒られても知らないぞ！！！――というあたしの心の叫びは残念ながら届かないみたいだ。授業そっちのけのクラスメイトを全く気にせずに分かり易く丁寧に、公式の解説をしている名も知らぬ先生Ａに同情しつつ、あたしは殺気の篭った視線を無視して、淡々と授業を受け続けた。

キーンコーンカーンコーン。

あぁ、やっとチャイムが鳴って、ランチタイムだ。
あたしが席を立ち上がるより先に、綺麗な女の子たちに囲まれた。
はぁー。どうしてこんな面倒なことが起こるのか・・・。

「有園、さん。ちょっと良いかしら」
「――ハイ」

溜息を吐きたい衝動を抑えて、誘われるままに彼女達の後を追う。
彼女達から逃げたって怒りが助長するだけだし、あたしが痛い目みないと納得できないようだからね――クラスの大半――否、こうなると学園中のほとんどの人が、と思ったほうが良さそうだ。

今だってお嬢様たちと連れ立って席を立ったあたしに送られる感情は――好奇・憎悪・嫉妬・優越――誰一人止めに入る人はいない。
それどころか、皆さんこの状況を愉しんでいるご様子。
こんなことが愉しいって・・・暗いよー。
まだ十代なんだから青春時代を暗黒にしちゃ勿体無いって。

そんなことを考えながら歩いていけば、甘い花の香り。
着いた場所は人気の無い、無駄に広い中庭。
なんというか、ベタといえばベタだよねー。
前の学校じゃイジメなんて無かったからなぁ・・・こんな経験値いらないんですけど。

口を開いたのはこのメンバーのリーダー格であろう美人さん。
つか、この学園美形ばっかりなんですが・・・。

「有園さん、天宮の御兄弟に随分とご迷惑を掛けているようね？」
「あー・・・そうですね。すみません」

ここで「迷惑かけていません」なんて言っても信じてはくれないでしょ？しかも事実迷惑かけまくりですから。
だから謝っておけばいいかな～と単純バカに思っていたら、お嬢様全員からブーイング。

「これまでしてきた数々のはしたない行いを認めるのね？なんて人なの！お優しいお二人につけこんで」
「どうせ汚い手を使っているのだわ」
「お二人のお側に貴女みたいな人がいると思うと寒気がするのよ！さっさと消えてっ！」
「どうせ、生まれも育ちも最低なんでしょ！？」

口を挟む暇も無く、文句を捲くし立てた彼女達の背後からちょっと柄の悪い・・・ヤのつく職業していますかー？的なお兄さん達がぞろぞろ現れた。いや、気配は感じていたんだけどね、まさかこんな展開になるとは・・・はぁー。

「使用人風情が・・・自分の身の程をよく分かっていないみたいだから、教えてあげる」

その言葉を合図に、お兄さん達が一斉にあたしを取り囲む。
囲まれた隙間から花弁のような唇に酷薄な微笑を浮かべ、彼女達が

中庭から去っていくのが見えた。

コレって・・・いじめの範疇越しているよね？
どうやらお嬢様方は愛らしい外見に似合わず大胆過激な方々のようです。
どんどん崩れていく可憐なお嬢様像・・・なんだかなー。
肩を落とし「ふぅ～」と思わずまた溜息。

それを怖気と取ったのか強面のお兄さん達が・・・申し訳なさそうに謝ってきた・・・。

謝る・・・？

「って・・・はい？」
「いや、その、嬢ちゃんすまねぇ。俺達もこんな馬鹿げたことはしたくないんだけどな・・・若頭の命令だからよ・・・」
（えと・・・どういうことでしょーか？？）

## 第7話　「これってお約束な展開ですか？」（後書き）

読んでくださって有難う御座います！

## 第8話　「アノ人ね・・・納得です」

「・・・倖城徹二（ゆきしろてつじ）・・・あの人かぁ・・・」
あたしは遠い目をして呟く。
あの人関連なら何が起きても納得出来る――そんな事実が怖い。

「はい。若頭がどうしても咲禾さんと連絡を取りたいと・・・」
「それにしたってもっと穏便なやり方があるでしょーに。絶対わざとだよね」
はぁーと小さく溜息を吐く。
そんなあたしに、ここまでの経緯を説明してくれた宏樹さんが申し訳無さそうに眉尻を下げた。

宏樹さんとは何度か面識がある・・・倖城徹二のお守り役――と言っても可笑しくないほど「若頭」に振り回されている不憫なお方だ。
でも、人は見かけに寄らないんだなぁ～コレが。
柔和な顔立ちの美青年な宏樹さんは、穏やかで優しいけれど、やっぱりアッチの世界では有名なお方で、日本でも最大規模の、広域指定暴力団【海淵組】の参謀的な存在なのですよ。

本当に色々な噂があるのだけど・・・。
特に若頭もとい、徹二さんと宏樹さんのコンビでやらかした数々の事件は伝説のように語り継がれている。
そういえば、そのほとんどの事件は徹二さんが原因で、宏樹さんは巻き込まれただけなのだと苦笑しながら言っていたなぁ。

それでもって不思議な事に、それらの数々の事件の中にあたしも何故かちょっとだけ巻き込まれたりなんかしちゃって、今では2人とも顔馴染み、というわけなんですよ。
しかしねぇ、最近会わないからってこういう強硬手段に出られるとやっぱり吃驚しちゃうじゃないですかー。

しかも、事態がややこしいことになりそうな予感がするし・・・。

「ご迷惑をお掛けして申しわけありません」
浮かない顔をしているあたしに、宏樹さんが丁寧に頭を下げる。
あたしはといえば、何も悪くはないはずの宏樹さんの謝罪に慌てた・・・慌てふためきましたとも。
だってさ年上の、本来敬うべき人に丁寧に謝って貰うのなんて、一介の高校生であるあたしが慣れているはずがない。

えーと・・・取り敢えず、混乱している頭でもこれだけは言える。

「迷惑ってなんの事ですか？」
「――え？」
「いや、あたし的には全くこの状況迷惑じゃないです。むしろ感謝したいくらいですよ。だってもしも、宏樹さん達じゃない他の組の人達がゾロゾロ現れたりなんかしたら、さすがにちょっとヤバかったと思うので」

「――だから、有難う御座います」
あたしが頭を下げると、頭上からふっと笑った気配がした。
疑問符をつけながら顔を上げると、宏樹さんの綺麗な笑顔とご対面出来た。

「・・・咲禾さんはそういう方でしたね」
そう言って満足そうに頷く宏樹さん・・・うーん良く分からん。

Ｐｉｒｉｒｉｒｉ……。

突然鳴り出した機械的な着信音に素早く反応した宏樹さんは、携帯を手に一言二言喋ると、あたしへと視線を向けて、携帯を差し出してきた。

え？何々？どういうことですか？
視線で問えば、宏樹さんは困っているんだか、笑っているんだか良く分からない表情で口を開いた。

「これでも直接乗り込むと言い張る若頭を止めてきたので、痺れを切らしてあちらから電話を掛けてきてくれたみたいです」

「・・・・・・」

沈黙の間、差し出された携帯電話を見、微笑んではいても有無を言わせない雰囲気の宏樹さんを見、を数回繰り返したあたしは、携帯電話を受け取った。

あぁ・・・文明の利器って時には考え物だよね。

## 第8話　「アノ人ね・・・納得です」（後書き）

更新遅れまして申し訳ありません！

## 第9話　「一生敵わない人」

掌に馴染む薄い機械をあたしは手にした事が全く無い。
それどころか、家の電話さえ無かった。だって電話代なんて払う余裕が無かったんです。

≪携帯電話≫という代物を使うことに緊張しているのか、徹二さんと話す事に緊張しているのか判別出来ないまま、恐る恐る機械越しの徹二さんに話しかける。

「徹二さん？久方ぶりです、有園咲禾です・・・」
「・・・咲禾・・・連絡待ちくたびれたぞ――？」
電話越しでも、クッと口端を上げて愉快そうに微笑している徹二さんの姿がありありと浮かんで、あたしは少し微笑んだ。

「連絡遅れてすみませんでした。それはそうと徹二さん今回の件、一体どういうことですか」
そりゃ、迷惑とかではないけれど、やっぱりああいうことは心臓に悪いと思うのですよ。
「どういうことって・・・もう説明は聞いただろう」

「・・・全部徹二さんが仕組んだってことですか？」
「まーな。下らない仕事だったからなー即刻断ろうと思ったら・・・咲禾、お前が標的だったという訳だ」
「・・・どんな訳でしょーか。お陰でコッチは大変なんですが？」

あぁ、相変わらず徹二さんは自分の道を突っ走っていらっしゃる。
呆れを通り越して何だか笑えて来ちゃいましたよ。

「あー・・・ワリぃ、ワリぃ」
「謝っているつもりですかー」
「そうカリカリすんなよ。禿げるぞ？」
「カリカリ？何の歯応えですかー？剥げるって徹二さんの厚い面の皮が？大歓迎ですけど」
「ククッ。言うようになったじゃねーか」
「徹二さんほどでは御座いませんがねー」

こういう会話も久しぶりで、あたしはついつい声に出して笑ってしまった。

「よし、まぁまぁ元気そうだな」
「・・・・・」

――あぁ、やっぱり徹二さんにしてやられた。
そうやって優しい声で、あたしのことを気遣ってくれる。そういうことをされると、何だか体中がむず痒くなるんだ・・・。コレって一体、何アレルギーですか？

はぁ、だから徹二さんは少し苦手なんだ・・・。
本当に・・・どうしてこういう事を自然にできるんだろう。
こんなことを聞いたらニンマリ笑って「俺様だからな！」って胸張って言いそうだ・・・つか絶対言うだろうから一生聞かない。

「今、お前が何を考えているのか手に取るように分かるな」
「・・・・・」
「咲禾、照れているのか。可愛いな」
「・・・徹二さん、性格悪いです」
「ハッ、今更」
うぁーだからこの人苦手なんだぁー。
こうやって人をからかう事が生き甲斐なんだ・・・悪趣味。

黙りこんだあたしに、元来気の長くない徹二さんは、拗ねたような口調で喋り始めた。

「んで？あの件以来、本当に連絡してこねーし。優しい俺は心配で胸がはちきれそうだったんだぜ？」
「あーはいはい。それはご心労お掛けしてすみませんねー」
あたしのテキトーな返事に、徹二さんの雰囲気が変わったのが電話越しでも分かった。

「言っとくけどな、咲禾のことを考えない日はなかった・・・本当に心配してたんだからな」
「・・・・・」

――息を、呑む。

あぁ、まただ。
また真剣な口調でそんなことを言う。
電話越しでよかった・・・あたしはこんな時どうしていいか分から

なくなる・・・きっと情けない顔をしているに違いない。自分が自分じゃなくなるような感覚が怖くてたまらない。

「まっ、俺が勝手に心配していただけだから」
「・・・えーと・・・」
何を言って良いのか分からないあたしは言葉を詰まらせる。

ふと徹二さんが少し笑ったのを気配で感じた。
「はいはい、お前は心配されるのなんて慣れてないから、ちっとくすぐったくて鬱陶しいかも知れないが、気持ちは素直に受け取っておくものだぞ？覚えとけ」
「――はい」

あーあ。
また助けられた。

「それで？実のところ何でそんな趣味の悪い金持ち学園にいるんだよ」
「あー、それは言えません」
いくら徹二さんといえど、これは極秘。
天宮とあたしの問題だ・・・巻き込むわけにはいかない。

「ふん、そう言うと思って調査済みだ」
「・・・・・」
じゃあ訊かないで下さい・・・はぁ、プライバシーってなんですか？
思わず自棄になってしまうあたしを誰が止められますか？コンニャロー。

「面白いことになってんじゃねーか」
「・・・ちっとも面白くないです」
「――ふむ。俺も参戦するか」
「心の底からやめて下さい」
思いのほか冷たい声色が無意識に。
やると言ったらこの人はやる人だ。しかも今回の様な奇襲あり。
厄介極まりないよ本当に。あの温厚な宏樹さんでさえ、徹二さんのことノシ付けて誰かにクール宅急便で送りたいって言ってたし・・・。あれはマジな目だったなぁ。

「ククッ、そー言われるとますますヤル気が出てくるってもんだよな～」
「相変わらずたちの悪い・・・」
ボソリと呟けば、幾分呆れたような声が間髪入れずに返ってきた。
「そりゃお前だろ？全く、冗談抜きに相当恨み買っているみたいだぞ・・・今回お前を潰す依頼をしてきたのは中流階級の連中だ。これが上流階級なんてことになれば・・・分かるか？」
「――はい」
真面目に返事したあたしに、徹二さんがそれはもう大きな溜息を吐いて下さった。なんですか？何か文句があるんですかー。
「否、お前はいつも危機感が足りない。なんでそう、必要以上にトラブルに巻き込まれるのに無防備なんだ、この阿呆」

「くっ・・・徹二さんに・・・あの徹二さんに阿呆って言われた」
「問題はソコじゃねー」
「いや、大問題」
「ったく。咲禾、良く聞け。お前の状況は最悪だ。味方が誰一人いない敵だらけのフィールド、加えて敵は、暇も金も鬱憤も余り有るほど持っている連中だ。そこへ好都合な事に、大して地位も金も後ろ盾も無い貧乏人＋嫌われ者のお前・・・絶好の玩具、イイ獲物だ

ろうよ」
「んーまぁ・・・なんとかなるでしょう」
というかそう思ってないと、やっていられないって。
「どこから来るんだよ、その自信は」
「強いて言うなら日本産」
本当は自信なんてコレっぽっちもないけれど、ちょっと虚勢を張って、ふざけてみた。

「・・・・・咲禾・・・・」
うぉー怒っている。
うん。普通に怖い・・・もうふざけないぞぉー。

「分かってますよ、徹二さん。無茶はしません」
「――約束か？」
「約束です」
「血判押せ・・・と言いたい所だが、勘弁してやる」
本気で残念そうな徹二さん。
血判って・・・あたしを新世界に引き込むつもりですかー。

「兎に角、これ以上悪目立ちするようなことはするな」
「はい」
「ったく・・・困った時ぐらいは連絡して来いよ？」
「――はい」
徹二さんの優しい声に、少し詰まりそうになりながら、なんとか返事を返せた。

「・・・また、連絡する。それまで約束、守れよ」
「はい――えーと、あの、その・・・」
あたし日本人なのに日本語喋れていない。

「ん？」
「あ、有難う御座います」
ようやく言えた言葉。
言い終わった途端に恥ずかしくなってきたぞー。なんでだろう、親しい人に言うのはとても照れるんだよねぇ。電話越しの見えない相手に縮こまっていると、微かに響いたクスクスという笑い声を聞いて更に居た堪れなくなる。

「――どういたしまして」
不意に返された返事はあまりにも温かい。
さっきまであんなに可笑しそうに笑っていたのに・・・。

うーむず痒い。
心がほわほわと落ち着かない。
やっぱり徹二さんは苦手だ。

そして痛感する――あたしはこの人に敵わない。
恐らく・・・一生、ね。

## 第9話　「一生敵わない人」（後書き）

読んで下さってありがとう御座います！！

## 第１０話　「痛いのはどこですか？」

徹二さんとの電話を終えたあたしは、口をあんぐりと開けっ放しにして呆然としているお兄さん達を見て笑う。どうやら徹二さんとあたしの会話はお兄さんたちにとって衝撃的だったらしい。

まあ、海淵組の若頭である徹二さんにあの態度・・・そりゃ吃驚するよねぇ・・・。

宏樹さんだけは、ニコニコといつものように笑っていたけど。

さてさて問題はここからだ。

お坊ちゃま、お嬢様の通うこの学園はセキュリティ万全。

ここに宏樹さんたちが侵入できたのは、あのお嬢様たちがなんとかしたのだろうけど、帰り道は？・・・って、愚問でした。

何て言ったって、宏樹さんがいるからね。

一人納得したあたしは弘樹さんたちに早々に帰っていただくことにした。

だって、万が一授業中でも中庭に誰か来たら大変だしね。

第一、宏樹さんたちも多忙なんだから、あたしなんかに付き合う必要はない。

笑って手を振るあたしに、宏樹さんは振り返りなにか物言いたげな目をしたけれど、あたしがニッコリ笑うと、諦めた様に苦笑して、踵を返した。

おーこれで万事解決・・・そんなわけには行きませんとも。

「んー、どうしたもんかねー」
あたしは少し・・・ほんのすこーしだけ困っていた。
そう、あたしが今無傷でいることって問題じゃないか？
あのお嬢さんたちはあたしをボッコボコに痛めつけて欲しいと、依頼してきたらしいから、あたしが無傷じゃ納得しないし、何故無傷なのか疑念を抱くだろう。

普通に考えればあの大人数相手（しかもその手のプロ）に、小娘一人がどうしたって敵いっこない。
しかーし、ビッグサプライズでこの通り傷一つありません。

どー考えても不自然ですよねー。

自分が無傷でいることがどんな影響を与えるのか、分からない訳ではない。
なんとも無い顔をしてあのお嬢様たちの前に現れる自分・・・・うぁーお嬢様達の怒り狂う姿が目に浮かぶな。

まぁ、徹二さん達・・・否、海淵組には問題ないからいいんだけど。
もし、あたしが無傷でいることをお嬢様たちが怒っても、海淵組に文句が言えるわけが無い。だって格からして全く違うからね。
本当なら海淵組はこんな馬鹿げた仕事を引き受けないし、こういう仕事を海淵組に依頼するなんて人間は世間知らずで、怖いもの知ら

ずのあのお嬢様たちくらいだろう。
考えながら自己嫌悪・・・あぁ、やっぱりあたしは迷惑を掛けたんだ。

徹二さんの顔が浮かぶ。
あたしなんかのために、こんな依頼を引き受けて、宏樹さんまで送り込んで・・・助けてくれた。そこまでして貰うような価値なんか自分には全く無いのに・・・。

温かい優しさを上手く返すことなんて出来ないくせに、あたしはいつも徹二さんたちから貰ってばっかりだ。それが情けなくて、くすぐったくて・・・どうしようもないほど愛しくて、苦しいんだ。

――――苦しいんだよ・・・。

こんな時、あの人ならどうするんだろう。
あたしの頭を撫でて、優しく頬を撫でて、ぎゅっと抱きしめてくれた温かい腕。
あたしに初めて笑いかけてくれた人、あたしのために泣いてくれた人。

けれど・・・もう、居ないアナタ・・・。

あたしは今も問いを投げかける――あの人は居ないのに。
返ってくるはずの無い答えを探している。

本当は・・・答えなんてどうでもいいんだ、ただ、もう一度笑って、
頭を撫でて、頬を撫でて・・・あたしを抱きしめて欲しい。

あぁ、なんて浅ましいんだろう。
そんな資格、自分には無いのに。
綺麗で優しいあの人を想うことなど許されはしないのに。

目を閉じる。
花の香り。
風の音。
柔らかな日差しの感触。
生きている、と感じる。
あたしは・・・生きているんだ。

動かせない事実を受け入れて理解する。

生きている限りは、生きようとしなければいけない。
亡き人のために、今日を生きる人と共に。

あたしは、進まなくちゃいけないんだ。

そう思った瞬間、なぜだか胸がキリリと痛んだ。
可笑しいな、守ってもらった身体は無傷なのに・・・確かに感じた
痛みを無視して、あたしはこの中庭から出る。向かう先は２－Ａ。
さぁ、立ち止まっている暇は無い。

## 第１０話　「痛いのはどこですか？」（後書き）

更新遅くなりすみません！！
えー、こんな駄文ですが読んでくださって有難う御座います。

## 第１１話　「先生からのご忠告」

ざわざわざわ・・・・シーーン。

うぉー。皆さん吃驚しているね～。
呼び出しくらったあたしが、無傷で・・・しかも教室に戻ってくるとは思わなかったんだろうな。

突き刺さる視線を無視してスタスタ歩く。

窓際にある自分の席に着く前に、クラスがざわっと波立った。
んん？振り返ればあのお嬢様たちが呆然とバリバリ元気なあたしを凝視している。

ありゃーもうバレましたか。
それにしたってお嬢様方、人をそんな幽霊を見るような目で見ないでください。
幻じゃありませんから。

「なんで貴女がここに居るのよ！！？」
動揺しまくっているお嬢様たちは、半ば叫ぶようにして口走った。
クラスメイトの視線が一気にコチラへ向く。

「えー・・・なんというか我ながら悪運が強いみたいです」
「なっ！！どういうこと！？」

「言っても良いんですか？この場で」
あたしの台詞に彼女たちは悔しそうに黙り込んでしまった。
そりゃあ、口外できるような話ではないよねぇ。
というかこの状況自体あまり良くないんじゃないですか？
皆興味津々。
そろそろ授業が始まるのに・・・。
――ガラッ
あー・・・と思った時には先生らしき人が入って来ていた。
最悪なタイミングだ。
不穏な空気漂う教室。
そしてあたしと向かい合うお嬢様方。
この状況どーですか。
先生（多分）はそんな教室を見回すと、ジロリとあたしを睨んできた。
うぉっ！スゲー目力。ちょっと先生、そんなんじゃ初対面の人と友好的な関係は築けませんよー。
「篠田」
「あ、はい」
委員長で、あたしの隣の席でもある篠田君を呼びつけた先生は、い

かにも面倒そうに「何かあったのか？」と訊いた。
篠田君は可哀相にも、あたふたと周りに助けを求めるかのように目をキョロキョロと泳がせる――――と、あたしとばっちり目が合った。
いやいや、ナンですかその目は。
子犬？子犬なのか？
あーもー、そういう目は反則だから。
くっ・・・・・・・・・有園咲禾、負けました。完敗です。
「――なんでも有りませんよ、先生。あたしがこの学校のことを良く理解出来ていなかったようで・・・少し皆さんを驚かせてしまったようです。すみません」
「――――そうか。気をつけろよ、有園。お前等、さっさと席に着け」
明らかに苦しい言い訳だったけど、あっさり通った。
いやぁ、言ってみるものだねぇ。
それにホッと一息つく暇も無く・・・痛い視線にチラリと背後を見やる。
鬼の形相でコチラを睨むお嬢様・・・早く自分のクラスに戻って下さい、マジで。
その願いは授業をしたい先生も同じだったようで、サックリ彼女たちは追い出された。
なんだかこの先生好きになれそうですよ。あはは。
「有園。英訳してみろ」
あれ？もう授業始まっていたのですかー。
前を見れば、相変わらず無表情な先生が黒板に書かれた長い文を指

差している。

「はい・・・・To see a doctor is “to hold onto the chance to live more healthily and longer.” To this end, we must become “good patients.”

A good patient is someone who has a strong will and intention to “get better.”

It is important first to have a good grasp of our own state of health and to have the doctor understand our problem. By doing so, we will ensure accurate treatment. This is consequently for our own good.」

ふぅー終わった。

長かった。

あれ？なんかシーンとしてませんか？

あぁ、あたしのあまりに酷い英訳に固まっているんですか、そうですか。

まぁいいさ。あたしは日本を出る気ありませんからぁ？

――なんて捻くれたことを心の中でぶつくさ言いつつ、やることやったんだから・・・と、さっさと席に着く。

「おい、お前等いつまで固まってんだ――有園、まぁまぁだったぞ。
さて、転校生の実力も分かったことだし、授業を始める」

そうそうあたしの実力も分かったし・・・って、オイ。
それってあたしを試したってことですかー。
一応転校する前に、編入試験受けたんですが？

胡乱気にセンセイを見遣ると、うげっっ！！
滅茶苦茶、こっちを凝視してまーす。
何ですか、その邪悪極まりない満面の笑顔は。

あたしはあまりの衝撃に頬杖ついていた手を滑らせた・・・おぉっと！
危うく顎が2つに割れるところだったぜ。
いや、そんなことより・・・あたしはニヤリと意地悪く笑うセンセイを一瞥する。
心無しか寒気が。

あたしは出来るだけセンセイを見ないように努めた。
というか、授業なんてきいてませんでした。
どうか、何事も無くこの時間が終わりますように、なんて無理な願い。

「有園、職員室に来い・・・今すぐな」

そーなるんですか、やっぱり。
まぁ、この昼休み・・・さっきから攻撃したくてうずうずしている連中から逃れられるいい口実になるし・・・この際、センセイに従いましょう。

職員室・・・と言われついてきてみれば、通されたそこは、この学園にしては狭い何の用途に使われるのか予想できない空き部屋だった。
部屋の真ん中には一人用のソファ（革張り）が2つ、向かい合わせになって置かれていて、その間には小さな四角いテーブルが置かれている。
それ以外は何も無い、この学園にこんな部屋があったのか・・・と少し驚く。

「まー座れ」

促されたあたしは、ソファに腰を降ろす。
向かい側に座った先生を確認して、話を切り出す。
「えーと、何の用事でしょう？」
「お前な・・・はぁー・・・」
心底呆れた、という溜息。

「いや、何ですかその反応。微妙に傷つくんですけど」
「有園、分かっているだろう？お前の立場と現状を」
やっぱりその話か・・・。
本当は呼び出されたときに分かっていたのだ＜用事＞なんて。

「ああー。そのことですか、センセイには迷惑掛けないようにします」
あたしはヘラッと笑って言った。
センセイは途端、眉間に皺を寄せた。
あぁ、ただでさえ無表情なのに・・・それでじゃあ、ますます威圧感が増しますよー、終いには子供に泣かれますよー。

「そういうことを言っているんじゃない。ったく、噂通りの馬鹿ではないが、コレは違う類の馬鹿だな」
「・・・・・いや、聞こえてますが」
「あ？当たり前だろう。聞こえるように言っている」
「さいですか」

えーと、あたしは確かに馬鹿ですが、こうも馬鹿、と断言されると・・・なんだか遣る瀬無い気持ちになるのですよ。まーいいけどさ。
あたしが心持ち遠い目をしてあらぬ方向を見ていると、空気が変わった。
あたしは、向かいにある目を真っ直ぐに見る、それが合図となってセンセイは静かに口を開いた。

「今日呼び出したのは、忠告だ。お前も薄々は感じているだろうが、この学園はお嬢様、お坊ちゃまのための学園だ。普通じゃない。この学園では教師は生徒より弱い立場にある。現に生徒によって、追い出された教師は少なくない。この意味が分かるな？俺たち教師は大半の生徒の敵であるお前に、味方できない――――お前がどんなに酷い目にあっても、見て見ぬ振りをするぞ」

「・・・・・えーと、先生の名前、教えてください」
怪訝な表情をした先生に、目で促すと、渋々といった風に答えてくれる。
「・・・高木尋（たかぎじん）・・・」

「それでは改めまして、高木先生、忠告有難うございます」
「・・・礼を言う場面ではないが？」

「先生は、わざわざあたしに教えてくれました。それで十分です。先生は今出来る限りのことをしてくれましたから・・・感謝します」
あたしは心から頭を下げた。

これは確信に近い推測だけれど、あたしは教師からも嫌われている。
でも、高木先生は敬遠されて当然のあたしと、向き合ってくれた。
優しい人だ――そういう人の重荷にはなりたくはない。

「有園――」
「あたし結構こういうこと慣れているんで、まーなんとかなりますよ。大丈夫です」
ヘラリと笑ってソファから腰を上げる。
「・・・」
「では、失礼しました」

「・・・ふ、有園咲禾か・・・」

面白い。
こんな下らない学園で教師という役柄を演じるのは、最悪に気分が悪かったが・・・。
久しぶりに退屈しないで済みそうだ。

「さて、やるか」
そうだ、今日の有園咲禾について報告しなければ。
そしてこの学園の現状も。

数日前までの、仕事が増えたと面倒がっていた自分はいない。
今はただ、嵐の予感に胸を躍らせるだけだ。

## 第１１話　「先生からのご忠告」（後書き）

読んで下さって有難う御座います。
また新キャラです。しかも明らかに怪しいです（笑

## 番外編1　「どーゆーこと。そーゆーこと。」

番外編1　「どーゆーこと。そーゆーこと。」

「まーちゃん先生、どーゆーことですか」

しーんとした教室にあたしの声だけが教室に響く。
睨むようにして担任を見据えても、まーちゃん先生は困った顔をするだけだ。
その表情は、聞き分けの無い子供を仕方が無いなーと見下ろす大人のソレだ。
あぁ・・・腹が立つ。

「いや、だからな、有園は家の事情で転校となったんだ。急だったが・・・本人も納得していた」
「――納得？」

違う、違う。
そうじゃない。
あいつは・・・咲禾は・・・。

いつも笑っていて。
どんなに辛くても、笑っていて・・・ずっと友達やってるあたしでも涙なんか見たこと無くて。

――あぁ、そうか。

また笑って引き受けたんだ。
また荷物を背負ったんだ。

なにやってんの？
あんた頭良いくせに、本当は馬鹿なんじゃないの？

馬鹿な奴。
いつも笑ってないで、ちょっとは嫌だって怒ってみなさいよ。
今のあたしみたいに・・・子供みたいに駄々を捏ねてみなさいよ。
あんたがそうやって、聞き分けの良い子をやってるから、見てるこっちまで腹が立ってくるじゃない――苦しくなるじゃない。

そうよ。
あんたそんなに一杯荷物抱えてどうするつもり？
そんな重い荷物背負ってどこに消えたのよ？

どうせ、あんたの事だから、親切に荷物をもってあげようとした人にも笑って「大丈夫」だって言うんでしょ？
どうせ、あんたの事だから、いらないお節介焼いて新しい荷物をほいほい引き受けるんでしょ？

ねぇ、咲禾。

「・・・・・赤津先生・・・」
普段使うことの無い、苗字でまーちゃん先生を呼ぶ。

それは縋る様な声音だったかもしれない。

「有園さんは・・・笑ってましたか？」

「――――ああ。笑ってた」

言われた瞬間「あぁ、やっぱり」と、納得するのと同時に胸がズキズキ痛んだ。

「おい！長谷部！！」

まーちゃん先生に呼び止められけれど、あたしは足を止めなかった。教室を飛び出して、全力で廊下を駆け抜ける。

どうしよう、どうしよう。

泣きそうだ。

咲禾。

何で行っちゃったのよ。

あたしに一言も無しってわけ？

この薄情者。馬鹿。阿呆。間抜け。

思いつく限りの悪態をついて、気を紛らわそうにも、上手く行かない。

「っ・・・何・・・・！？」
ぐいっと腕を掴まれて後ろに倒れこむ。
あたしを受け止めた人は長い溜息を吐いて、仕方なさそうに呟いた。
「廊下を走るなって、小学校で習っただろう？」

「・・・まーちゃん先生・・・何で？」
「バカ。自分の生徒が教室から逃走したんだぞ。追わない訳ないだろ」
「でも・・・いっつも放って置くじゃないですか」
「それはサボりたい奴とか、一人になりたい奴とか・・・後は・・・・トイレ行きたい奴とかだけ。長谷部はどれにも該当してない」
「・・・一人になりたいです」
「駄目」
「何でですか」

「一人にしたら泣くだろ？」
「！！」

「だから、だーめ」

あぁ、もう。
本当にこの先生は腹が立つ。
普段はやる気無いのにこういう時は、何もかもお見通しみたいなそんな目で見るなんて・・・悔しい。
先生に抵抗するように俯いていると、無理やり顔を上げさせられた。

「・・・もう、泣いてんじゃん」
そっと、伝う涙を拭う手が優しい。
突然のことに呆然としていたあたしは、泣き顔を見られたことや、あまつさえ涙を拭ってもらったことを自覚して、羞恥に顔を真っ赤に染め上げた。

「――な、泣いてません！」
「あーはいはい」
「・・・・・・教室に戻ればいいんですよね・・・行きますから。もう大丈夫です」

「本当に？」
「――え？」

「長谷部、お前も有園も、泣かないな。今日初めて見たよ泣き顔」
「・・・・それは・・・」
「声を荒げたところも、初めて見た」
「――だって、咲禾が・・・いつも笑ってるから・・・」
悲しみとか、苦しさとか、心細さとか・・・無いはずがないその感情を、全部包んで強く綺麗に笑うあんたの隣であたしも笑っていたかったから・・・。

――だから――。

「――実は、有園から、お前宛ての手紙を頼まれてたんだ」

息を呑む。
咲禾からの手紙・・・。

「ほら」
差し出された無地の淡い水色の封筒を受け取る。

由香里(ゆかり)へ

突然だけど、転校することになりました。
急で時間も無かったからお別れもできなかったけど、まぁ元気でやって下さい。
んじゃ、遅くても半年くらいで戻ってくると思うから、心配しないで下さいねー。
では、また。

咲禾より

は・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
え・・・・・・？

半年？
戻る？

「・・・・・・センセイ・・・」
「うん」
「どーゆーことですか？」
「うーん、まぁ・・・そういう事なんです」
「・・・・・・・・っ！！！」
「は、長谷部、落ち着け。深呼吸しろ深呼吸」
「有園咲禾・・・許すまじ」
「・・・喧嘩はほどほどにな？な？」
「喧嘩？そんな甘いものじゃないですよ。先生」
「お、おいおい！」

「さぁ・・・手始めに・・・まーちゃん先生」
「は、はい」
「どーしてさっさと教えてくれなかったんですか・・・？」
「え？いや、その・・・」
「――あたしを揶揄って遊ぶなんて・・・」
「なっ！違う！誤解だ長谷部！！」
「問答無用。天誅！！」

あたしは、少量の血痕がついた拳を高々と振り上げる。
ふふふ・・・咲禾、戻ってきたら覚えてなさいよ！！！
ある意味すっきりしたあたしは、教室へ戻ろうと踵を返した。
勿論、まーちゃん先生は置き去りだ。

その頃の咲禾・・・。

「アレ？なんか悪寒・・・」

やべぇー三日前、新種の雑草にチャレンジしたのが不味かったかなー。

いやいや、それなら腹ですよねー。

「うーんと・・・まーいいか」

半年後、まーいいか・・・で終わるのかは分からない。

## 番外編1　「どーゆーこと。そーゆーこと。」（後書き）

咲禾の親友、長谷部由香里（はせべゆかり）さんです。類は友を呼ぶというか・・・笑

半年後が楽しみです。

では、ここまで読んでくださって有難うございます！

## 第１２話　「ランチタイムと伝言」

戦いの火蓋は切って落とされた。
それは、あたしの知らぬ間に。

昨日の今日、登校してすぐに気づいたのは、ある種の異様なざわめき、雰囲気。
すれ違う生徒たちの表情。

（これは・・・何か仕掛けてきたな）

自分の教室へ向かいながら、考える。
昨日のお嬢様たちの制裁を受けず、飄々としていたあたしを何とかしてやろうと火が着いたに違いない。

「ま、大体予想はつくけどさ」

1、机の上には真っ赤なペンキで「死ね」の文字。
（別に勉強は出来るので放って置きました）

2、すれ違いざまに早口で呟かれる罵詈雑言。
（痛くも痒くもありません）

3、体育の時間に乗じて、よってたかって膝蹴り、肘鉄。

（所詮はお嬢様、我慢できる程度です）

4、トイレに行けば、水浸し未遂。

（勿論、避けます）

5、階段から突き落とされ未遂。

（殺気丸出しデスよ）

6、直々のお呼び出し&熱烈ラブレター（不幸の手紙・剃刀レター）殺到。

（行きません。気にしません、即刻処分）

と、まーざっとこんなもの？

他にも色々あるけれど、毛ほどにも気にしていない。

そんなことより気掛かりなのは・・・アルバイトが見付からない事。

なぜか面接をする前に落とされてしまうのデスよ。

何とか面接にこぎつけても、あたしの顔を見た瞬間に「ＮＯ」のお返事。

あたしの顔に死相でも出ているんですかー？

んー・・・こんな事態は初めてで正直どうしていいのかさっぱり分からない。

これは何かの呪いなのかも知れないと本気で思う。

だって恨まれる思いあたりが多くて多くて・・・アレ？無性に悲しくなってきたぞー。

アルバイトのことで悩んでいられたのは、まだ幸せだったよね、１０分前の自分。

１０分後の自分。
今現在・・・絶対絶命デスか？
あたしはただ、お弁当を食べようと絶好の穴場スポット立ち入り禁止の屋上に行こうとしていただけなのに・・・。

「有園咲禾ってお前？」
「はい？」
聞き覚えの無い声に、振り返れば・・・えーと、明らかに柄の悪そうな男子生徒３人。
あーなんていうか、面倒くさい。
前々から疑問だったのですがね、どうしてこの学園であたしはまともにご飯を口に出来ないのか・・・揃いも揃って、お昼時にやって来てさー。
狙ってるんですか？
弁当くらい静かに食べさせて下さいヨ。

「しょーかチャンのお母サマから伝言があるんだけど聞く？」
唐突に言われたその台詞を理解するのに、数秒を要した。
あの人から、あたしに伝言？

これは・・・さすがに驚いた。
心臓がドクドクと早く鳴る。
無意識に強張る体、緊張が全身を駆け巡り、嫌な汗がつぅーっと背を伝う。

柄にも無く、動揺している自分がいる。
予測出来ていたことだったのに。
あの人がどんな手段も使う人間だということを、分かっていたのに・・・今の状態はどうだろう？馬鹿みたいに余裕の無い自分がいる。

ともすればみっともなく震えそうになる体を叱咤して、3人組を見やる。
あたしには、向き合う必要がある。確かめる責任がある。

大丈夫だ、なにがあっても戦う覚悟は出来ている。
———あたしはいつまでもあの頃のままじゃないんだ。

わざと挑戦的な笑みを浮かべて3人組を睨みつける。

あたしの反抗的な態度にムカついたのか、3人の中で一番でかい男が進み出て、あたしの頬を力一杯殴ろうとした。それを一歩さがって避ける。
全く、血の気の多い。

「なっ？！」
一応喧嘩慣れしていて、自信もそこそこあったのだろう。
あたしのような女にあっさり避けられて、心底驚いている。

「――いきなりグーは無いんじゃないですか？しかも、顔とか滅茶苦茶目立つのに・・・どうせ狙うなら、見た目分からない腹を狙ったほうがいいと思いますよー？」
うーん、我ながら的確なアドバイスだ。
と、思った瞬間、怒鳴られた。あれ？

「てめぇ・・・舐めてんのか！！？」
舐めてます、あんたの大振りな拳なんて一生あたしに当たりませんよー。
「俺たちさ、女だからって容赦しないケド？」
その気ならあたしも容赦しませんが？

あたしが普段売られても買わない喧嘩を買う気満々でいると、先ほどから傍観していた3人組の一番小柄な・・・でも一番威圧的で鋭利な瞳を持つ男子生徒が、初めて口を開いた。

「――――敦士（あつし）、灰（かい）、止めとけ。そいつ強い」

「千晶（ちあき）――こいつが？」
「・・・ああ、お前等2人じゃ勝てない」
「「・・・・」」

千晶、という小柄な男子生徒の言葉に、反抗することなく素直に従う2人を見て確信する。

あぁ、やっぱりこいつが頭デスか。
感情の無い目はこの歳の少年には不釣合いで、揺らがないその目が今まで何を見てきたのかなんて知らないけれど、こういう目をあたしは知っている。

「おい、あの女からの伝言、聞きたいか？」
「勿論」
即答したあたしに、千晶は表情を変えずに淡々と言う。
「明日、東山公園、午後１０時。そこであの女が来る」
「・・・」
「行かなきゃどうなるかは知らない」
「――分かった」
それだけ言って踵を返す３人組にあたしは口早に言った。
「伝えてくれて有難う」
あたしは言い終わると同時に駆け出していた。
３人組を振り返ることもしなかった。
もう・・・作り笑いをする余裕なんて無かった。

あの人と会うのは１０年ぶりだ・・・その間忘れたことなんてないけれど。
――明日、必ず行かなければ――
（行かなきゃどうなるかは知らない）
その通りだ。
行かなきゃどうなるか・・・想像したくない。
「・・・お前、真っ青だぞ」

校門を出た所で、初めて監視役の彼から声を掛けられた。
「大丈夫ですよ、素敵マッチョさん・・・」
あちゃー・・・心の中で密に連呼していたあだ名をペロッと言っちゃったよ。

「はぁ?!何、変なあだ名付けてんだ!」
予想通り、強面の上さらに眉間に皺を寄せて抗議するマッチョさん。
人一人殺ってそうな人相になってますよー。
ほぉら、可哀相に・・・マッチョさんを見た、生徒が青くなっているじゃないですか。

「失敬な。お洒落で良いあだ名じゃないデスかー。流行の最先端」
真面目な顔で語るあたしにマッチョさんは嫌そうに顔を顰めた。
(マジで言ってんのか?)という心の声が聞こえたので、(うん。大マジですが何か?)という視線を送る。

「素敵マッチョさんの何が不満なんですか」
「むしろどこに満足できるのか訊きたい。兎に角、ソレはやめろ・・・俺にはちゃんと名前が・・・っておい!大丈夫か?」

フラリと体勢を崩したあたしを咄嗟に支えてくれる。
うーわー・・・あたしって格好悪い。
「――っ。えーとすみません。大丈夫、です」
「どこがだ!今車を――」
「歩けます」
ヘラリと笑って言うあたしに、マッチョさんが顔を顰める。

「フラフラしながら言う台詞じゃないな」

「――志月様・・・」
素敵マッチョさんの呟きに、あたしは幻聴じゃなかったかぁーと、こっそり嘆息する。
ナンと言いますか・・・絶妙なタイミングだね。

「こいつは俺が送っていく」
「――ですが・・・」
「送る、と言っている」
「・・・はい。畏まりました」

ぼそぼそと2人の間で交わされる会話は、聞こえない。
ぼんやりとしていると、話が着いたのか、失礼します、と言って踵を返すマッチョさん。
あたしの横を通り過ぎていく時、一瞬絡んだ視線の中に、心配そうな色を見つけて驚く。
何故？と訊くことも出来ず、そのまま呆然と見送ってしまった。

「いつまで突っ立っているつもりだ。乗れ」

苛立たしげにそう言ったかと思うと、志月さんはあたしの手を乱暴に掴んで、車に押し込んだ。
こんなに感情を露にして怒っている姿は初めて見る。
そりゃあ、たった三日で志月さんのことが分かるわけじゃないけれど、いつも澄ました表情で、感情的に・・・まして声を荒げるなんてことしそうに無い冷静な彼が――。

あたしのいつも以上に回転の悪い頭でも、その原因は直ぐに思い至った。

「何か俺に言うことがある筈だ」

――あぁ、やっぱり。

浅く呼吸を繰り返していたあたしは、その問いにひゅっと息を詰める。

「伝言を・・・貰いました。明日、あたしはあの人に会います」

「何を馬鹿なことを。お前をみすみす行かせるとでも？」

「・・・・・あたしが行かなければ、あの人が何をするか分かりません・・・」

「では、お前を囮に使おう。明日は俺も行く」

「駄目です」

考える前にそう口にしていた。

心底不愉快そうに眉を顰め、嫌悪を隠そうともせず睨む目を、静かに見返す。

生憎、そんな目を向けられることは日常と化している、今更怯んだりしない。

下らないと思ったのか、不毛な睨み合いは志月さんが目を逸らした事で呆気なく終わりを告げた。

「俺はお前に意見を求めていない、そしてそんな権利もお前には無い筈だが？」

「――圭司さんには話してあるんですか？」

「お前には関係ない」

「・・・そうですね・・・」

確かに・・・あたしは何か言える立場なんかじゃない。
でも、もしあたしの予測が現実になったとしたら？
それを・・・今言ったところで、志月さんは引いてくれるだろうか？

――　否。

ガンガンと痛む頭のどこか冷静な部分が、もう答えを出している。
彼は意見を翻さない。

だけど、あたしだって引けない。
例え、この考えが杞憂であったとしても――。

だとすれば、あたしがやるべきことは・・・・・。

目の前の扉をノックするまで、色々考えた。
考えて、考えて、やっぱりこの人と話すのが一番なのだろうと、思えた。
それは天宮に協力すると決意した、あたしの通さなければならない筋でもあるのだ・・・。

どうぞ、という声に、あたしは一つ息を吐いてから、扉をあけた。
「失礼します」
「ふふ。珍しいね、君が俺の部屋に来るなんて。相応の用事があるのかな？――咲禾ちゃん」
わぁお！圭司さんてば相も変わらず爽やかな笑顔ですこと！
あたしは引き攣った笑顔で応戦しながら、負け戦同然の戦いを開始した。

「身勝手なのは百も承知でお願いが、あります」
「ん、良いよ」

ほんとに！？やった～～・・・・・

「って！まだ何も言ってないんですけど！！」
くそぅっ、出端を挫かれた！コレも奴の作戦か・・・・ってあらまぁ。
圭司さんてば余裕綽綽～優雅に紅茶なんか飲んじゃってさぁ・・・・
舐められてる！！コレは明らかに相手にされてない！！負け戦も何もこれじゃあ・・・哀しきかなひとり相撲。

敗北感に打ちひしがれるアタシ・・・だがしかぁし！めげない！負けない！諦めない！燃え上がるあたしを面白そうに見ながら、圭司さんは小首を傾げた。

「あれ？了解しちゃ不味かったかな？」
「了解も何も、お願いの内容をまだ言ってません」
「だって、内容大体予想つくし」
あっけらかんと、何でもないことのように言ってのける圭司さんの目は本気で、逆に戸惑う。

「良いんですか？そんなにあっさりと・・・」

「心配ご無用。俺、咲禾ちゃんのこと気に入っているから」
「理由になってますか、ソレ？」
「なる！」
力強く頷き、目をランランと輝かせている圭司さんはやっぱり読めない。どこまで本気でどこまで冗談なのか・・・全く、遣り難いったらありゃしない。

「あ～、ハイハイありがとーございます」
「信じてないね？泣くよ？？」
適当に流せばコレですよ。いい大人が瞳をウルウルと・・・あれ？なにこれ、あたしが虐めたみたいじゃないデスか。
「勘弁してください。乙女の涙以外は許容できない身体なんです。蕁麻疹がでます」

＊勿論、そんな特異な体質ではアリマセン。

「美青年でも？」
「・・・・・圭司さんはお幾つデスカ」
「心はいつでも十代です☆」
「語尾の星とテンションに年齢差を感じます・・・それはもうヒシヒシと！」
ああ――何でだろう・・・負けている気がする。というか、ただ喋っているだけなのに尋常じゃないコノ疲れ。踏ん張れ、咲禾。反撃の狼煙を上げるんだっ！

「というかっ！いい加減本題に・・・」
「だ・か・ら。良いよ～好きなようにして。それとも、止めて欲しい？危ないからやめなさいって言われたい？」
――柔らかな口調には研ぎ澄まされた刃が潜められていて、あたしの弱い部分を容赦なく抉る。そこには不甲斐ないあたしを叱咤する

かのような厳しさと、覚悟を決めろというメッセージがあった。
全く、圭司さんてば本当に読みづらい。
「・・・意地が悪いですね。でも、それなら良いんです。好きなようにしますから。でも、志月さんは・・・」
「心配しないでも志月なら大丈夫。なんと言っても俺の息子だからね」
「そうですか・・・」
「そうだよ」
言い切った圭司さんが、眩しく見える。なんだかこっちまで清々しい気分になってにっこり笑う。うーん・・・やっぱり家族っていいもんだなぁ。

「なんか・・・そういうの、良いですね」
自然と口から出てきた台詞に、圭司さんが敏感に反応する。
「？――どういうことかな？」
素で怪訝そうな圭司さんが珍しくて、マジマジと見ると視線で「教えて」と促される。
「・・・あたしはただ、圭司さんが志月さんを何の躊躇いもなく信じられる事が・・・その繋がりが凄く良いなぁって思ったんです。人を信じるって、難しいことだとあたしは思うから――」

「そう・・・そんなこと、初めて言われたよ」
どこか心此処に在らずの圭司さんが、無意識になのか少しだけ笑ったような気がして心臓が跳ねる。
出会ってから初めて、本物の笑顔を見た気がした。
驚いて言葉もないあたしと、思案に耽る圭司さん、沈黙した室内に電子音が響く。明らかに携帯が鳴っているのに圭司さんは出ようと

しない・・・・・・ん？あたしがいるから出られないんじゃ・・・。
そうとなれば即退出すべし！あたしは未だぼんやりとしている圭司さんに改めて向き直る。

「圭司さんお忙しいのに失礼しました――我儘をきいてくれて有難うございます」
「・・・否、こちらこそ有難う」
「え？」
「分からなくて良いよ。俺が勝手に喜んでいるだけだから――もう夜中だね。ゆっくりお休み」
「――はい。おやすみなさい」
釈然としないものを感じつつも、いつになく穏やかな表情の圭司さんの中であった変化が喜びであったなら、深くは考えまいとあたしは部屋を後にした。

これで明日は一人であの人と話す時間を手に入れた。
後は・・・志月さんか・・・。

咲禾が出て行った扉を見つめながら、すっかり冷めてしまった紅茶を飲みほす。
「繋がり」か・・・君にソレが見えているのだろうか？
それなら証明してみせて欲しい。繋がりとはなんなのか、俺たちがどうやってこれから繋がり合っていくのか・・・一方通行では存在し得ないこの感情の存在を伝えてほしいんだ。

擦れ違うには長過ぎた。
「守るため」なんて詭弁はもう言い厭きた。
現状維持も限界だ・・・壊していい、どんな形でも進みたい。

そのためなら協力しよう。

## 第１２話　「ランチタイムと伝言」（後書き）

長い間放置状態で申し訳ありませんでした！（汗

更新不定期ですが頑張って連載致しますので、宜しくお願いします。

## 第１３話　「フラグを折るのは不可能ですか？」（前書き）

２０１０．８／５　小説本文改稿致しました。

## 第13話　「フラグを折るのは不可能ですか？」

「――遅い」
「えーと・・・？」
何が遅いと？？？
早朝。一日の初めに会った相手にいきなりこんな台詞を言われても反応に困るのですけど、志月さん・・・。
あー、皆さん朝は“おはようございます”と挨拶しよーね。この仏頂面のお兄さんを見習ってはいけませんよ～。

「あたしに何か御用ですか？」
わざわざ、嫌いなあたしの部屋の前に来るということは――やっぱり“あの人”のことで何かあるのでしょーか。ぶっちゃけると、あの人に関しての情報なんて全く持っていないに等しいんだけどなぁ。

一体どんな用件かと身構えるあたしに、志月さんは一瞬躊躇したあと抑揚のない声で「送る」とだけ言って、呆気にとられるあたしを尻目に歩いて行ってしまった。

送る・・・って、車で？？
今日は遅刻の心配はいらないのですけど・・・どうして？
首を傾げつつ、志月さんを待たせてはいけないと急いで後を追う。

志月さんとまた一緒に登校なんて・・・！昨日も不可抗力とは言え、車に乗せられて一緒に下校してしまったのに！！あぁ――死亡フラグ3本は余裕で立っちゃうね、絶対。学校中の視線を釘付けにしちゃうよ？憎悪で。色々なものがビッシバッシと突き刺さっちゃうん

だよ？殺気もしくは物理攻撃で。

結論。

即刻お断りすべし。

出来るだけ穏便にことを運ぶ――それが先決。

姿勢正しく伸ばされた背中に声をかける前に、大きく深呼吸をする。

こちとら死亡フラグ３本が立つ前に叩き折らなきゃなんないからね？気合いも入るってものですよ・・・。

「あの、志月さん」

「何だ」

うぅーわぁー！！

冷え切っている・・・「何だ」と応じる一言でさえもあたしに対する嫌悪感がにじみでているよ・・・どうしたもんかねぇ？死亡フラグを折る前に、心が折られそうなんですけど！ＨＰ（ヒットポイント）が朝から激減しているんですけど！！これって今日一日を乗り切れない感じですか？明日を夢見ちゃダメなんですかーー！？

いや！ネバーギブアップだ、咲禾！！ここで負けたら・・・明日は東京湾の深い海底かもしれないぞ！！

ぐずぐずと何も言いだせないあたしをじっと待つ志月さん。

その眉間の皺がＭＡＸ限界を超えたところで、殺られる前にもうひと頑張り！という愛と平和の精神を実行に移す。

「今日は遅刻するような時間じゃないですし、車で送ってもらうなんて悪いので歩いて・・・「監視するためだ」

歩いて・・・行きます。と続くはずが、遮られた挙句――監視？

「監視ってどういうことですか？」

今さらだ。監視なんて素敵マッチョさんを毎日つけている筈なのに、

その上一体何をするというのだろう？
「今日の夜、あの女と接触する予定だが、万が一・・・お前に逃げられでもしたら面倒だからな。今日一日学園内でも見張りをつける」
志月さんのさも当然の処置だと言う表情に、自分が窮屈な箱にでも押し込められたかのような圧迫感に襲われる。それでも――

「そう、ですか・・・。判りました」

――異論は、ない。
あたしはあたしの意思でここに居る。
けれど、居るだけでは何も変えられない――この事を分かっている分だけあたしはまだ大丈夫な筈だ。もがいて、足掻いて、気づくことが出来る。掴むことが出来る。成せることがきっとある。――周りを変えたいと思うなら、己がまず変わらないといけないのだから。

ざわざわ。

あー。うん。
取り敢えず視線が痛い。

校門前で車から降りた途端にあたしと志月さんに集まる視線の、なんと素早く、多いことか・・・！最近のご子息、ご令嬢は、後ろに目でもついているのでしょうか。それともアレか？某妖怪アニメの主人公が活用している「父さん、妖気が！！」的なものが装備されておられるのですか？

「はぁ」

小さく、小さく。斜め前を歩く志月さんに気付かれないように溜め

息を吐く。
本日で2回目の、志月さんと“一緒にご登校”という大変不本意な自滅行為をしてしまった代償は計り知れない。仏の顔も3度まで・・・なんて諺があるけれど、それは仏様だからこそのご温情ですヨね。ここの学園の皆さん――特に天宮人気は凄まじいからなぁ。どうなることやら・・・。

あぁ、さっきから頭痛が酷くなっている気がする・・・。

暗雲を背負って、トボトボ歩く私に誰かの足がサッと突き出されるが、無意識にソレを避ける。こういうのには敏感なんですよ。いっその事、引っ掛かれば良かったか？――一瞬そんな考えが過るが、そんな事をすれば嫌がらせに火がつくだろう。
引いても、前に出ても危ういなんて、面倒だなぁ。

ここはひとつ、開き直るしかない。
結局のところ、目立たず、騒がず、大人しく――はもう手遅れなのだから、後はもう気の持ちようだ。

私に集まる視線の先は・・・・・そう。人間じゃない！
「人参、じゃがいも、玉ねぎ・・・人参、じゃがいも、玉ねぎ、人参、じゃがいも、玉ねぎ・・・かぼちゃもイケるか？」

背後から何か意味不明な呟きが聞こえてきたが、志月は賢明にも振り返らなかった。

スタスタと前を歩く志月さんは何を考えているのか。
ここは学園の5階廊下。エレベーターで上ってきたこの階には1学年のクラスがあるのだけれど・・・。ああ！ここまで来ると嫌な予感しかしない！！

「志月さん・・・、どこまで行くつもりですか？」→訳『志月さん・・・、どこまで着いてくるつもりだコンニャロー。もしかしなくても、あたしのクラスまで着いて来るおつもりですか？――もう本当に勘弁して下さい！！！！一刻も早く貴方から離れないとあたしは死ぬ！冗談抜きで射殺される！！』

口では言えない言葉の数々を目で訴えようと前を歩く志月さんをじっと見つめる・・・が、志月さんは振り向かない。あたしに視線を合わせない。オーマイガッ！！話し合うためのスタート地点にさえ立たせて貰えないってことですか！！？

「お前のクラスは此処だったな？」
「・・・はぃ」
結局、着いてしまった。
うふふ。目の錯覚かなぁ？目の前の扉が地獄の門に見えてきたよ。

――ガラッ。

「あ」
「あ・・・。有園さん」

勢いよく扉を開けたのは、委員長であたしの隣の席でもある篠田君だった。因みに得意技は子犬のような目。――と勝手に思っている。

「おはよう。篠田君」
「うん。おはよう」
何だかぎこちないけれど、こうやってあたしに挨拶を返してくれるのはこの学園では篠田君しかいない。本当は・・・嫌われ者のあたしと関わっているなんて、篠田君に迷惑を掛けるだろうから、挨拶もしない方が良いのかも知れない。

それでも、こうやって普通の事を普通にしてくれる存在にあたしは救われているんだけれど・・・。本当に篠田君は良い人だよ！！
感謝をこめて篠田君に笑いかけると、一瞬びっくりした顔をした後、物凄いスピードで廊下を走り去っていってしまった。間違いなくトイレを我慢していたんだね。頑張れ！いざとなったら内股になるべし！！

「篠田か・・・」
「え。何か言いました？」
「お前――、いや。良い」
「はい・・・？」

志月さんは無言で首を横に振ると、スタスタとあたしのクラスに入って行ってしまった。え゛！？ちょっと待って！！
慌てて追うあたしに、志月さんは教室をぐるりと見回し、ある一点を見咎めて眉間に深い皺を刻んだ。
「お前の席は？」
そう聞きながらも、志月さんの視線はある一点に絞られている。
「アレです」
もう、いくらなんでも取り繕うことなど出来ないと観念する。指差

したその机は、見るも無残な姿になっていた。昨日より数段パワーアップしたペンキでの落書きは、どこで習ってきたんだ？というような酷い暴言が並んでいるし、真ん中にはご丁寧にもナイフが突き刺さっている。

「いつからだ？」
「えっと・・・。昨日からです」
「成程」

もはや、志月さんの登場で浮足立っていたクラスのザワザワとした雰囲気は微塵もなく、教室内には重苦しい空気が漂っていた。

何でこうなるか・・・！これはもう、考えている暇なんて無いね。
兎も角・・・。

「志月様、場所を変えましょう」
教室内で“志月さん”は拙いので、様づけすると、呼ばれた本人が実に嫌そうに眉間の皺を更に深めた。
ったく、仕方ないでしょーが。あたしだって鳥肌もんだってのに、我慢しなさい。お坊ちゃん。
「場所を変える必要がどこに・・・「有ります」
志月さんの暴走を止めるべく、ＫＹな発言を強引に遮った。
そして、今度こそ目で訴える。
『必要有るに決まっているでしょーが。教室内の空気を敢えて乱すのは止めてくださいませんかねぇ？自分の発言力がどこまで及ぶか判らない訳じゃないですよね。そこまで無能じゃナイですよね！！！』

「・・・・・。良いだろう」

「恐れ入ります」

ほんの数秒・・・。しかし確実に志月さんには伝わったようだ。
もしくはあたしの余りにも鬼気迫る表情に引いたのかも知れない。
ええい！どっちでも良い！！結果オーライ。あたしが勝者！！

志月さんと共に教室を後にするため、クラスメイトに背を向けた瞬間、誰かの強烈な視線が背中に突き刺さった。
出来るだけ顔を動かさないように、視線の先を辿る。

あの美女さんか・・・。
転校初日に、ご丁寧な忠告をしてくれたお嬢様が他の天宮家俄かファンとは一線を隔した目であたしを睨んでいた。
逸見銀行のご令嬢、逸見雛菊（いつみひなぎく）さん。
文句なく上流階級の人間であり、このクラスのお嬢様のリーダー的存在でもある。――ええ。調べましたよ。自分への敵意に満ちているこの学園で情報があるのと無いのとじゃ生存率は全く変わってくるだろうからね。気分はサバイバルですよ・・・。
息つく暇もないとはこのことだねぇ～。いつかジャ○クバウアーと張り合えるほど厳しい２４時間を過ごしていたりしてね～・・・うん。無い。それは無い。無いよね？！

取り敢えず教室を出たあたしと志月さんはエレベーターに乗るために来た道を戻っている。
授業開始まで後僅かにも関わらず、素晴らしい野次馬根性を発揮した方々は一人残らず、志月さんの睨みに耐えられず、半泣きで帰って行った。よって、廊下は無人である。
この人、目からビームでも出るんじゃなかろうか・・・恐ろしい。
隣を歩く志月さんに疑惑の目を向けていると、エレベーターを前に

して志月さんは立ち止まり、あたしに冷めた視線を投げて寄こした。

「どこに向かうつもりだ」
「どこ、というか・・・。志月さん、授業は良いんですか？」
「そんなものはどうでも良い」
「はぁ・・・、ソウデスカ」
この人、学生の本分を――。まぁ、本人が良いなら良いとしよう。

さて、2人で話し合える場所か・・・。
ふと、高木先生と喋ったあの部屋が思い浮かんだ。うん、あそここそうってつけな場所だ。

「2階にある部屋を使いましょう」
「――2階？」
「行けば分かります」

## 第１３話　「フラグを折るのは不可能ですか？」（後書き）

ここまで読んでいただいて有難う御座います！

## 第１４話　「謝ったその後が大切です」

「ここです」
この学園にしては狭いと言える部屋へ、志月さんと一緒に入る。
「ここは・・・。いつの間にこんな部屋が？」
「え？前からあったんじゃないんですか？」
「いや、以前は無かった。この階は春休みを使って改装工事をしたと聞いていたが。お前、ここをどうやって知った？」

ギクリとする。
高木先生に忠告を受けたことを話すのは、躊躇われた。
ここで名前を出せば、あの高木先生も巻き込まれてしまいそうで、嫌だった。

「――――授業中に上の空だったと、先生に注意を受ける際にここを使いました」
「確かに、職員室から近いな。――生徒との対談のための部屋なのか・・・？」
どうやら隠し事に感づくことはなかったようだ。
それでも、志月さんは何かが引っ掛かる様子だったが、考えても埒が明かないと感じたのだろう。諦めたように一人用のソファに腰掛けた。

「お前も座れ」
「はい」
大人しく向いのソファに座ると、志月さんはまた険しい表情になる。
この人はいつも眉間に皺を寄せていたり、顰め面をしていたり、８

割は無表情だし・・・。大丈夫なのか？

「カルシウム、摂れています？」

「何の話だ」

心配したのに、ばっさり切り捨てられた。しかも不快そうに。坊ちゃんのバカ、バーカ。あ、これからイラッとしたら坊ちゃんと心の中で呼んでやる。ふふ、ささやか過ぎる反抗ですよ。

そんな下らない企みを考えているあたしを睨み据えた志月さんは、厳しい声色であたしを問いただす。

「・・・お前、何故あんなことになっていると言わなかった？」

あんなこと、というと・・・やはりあの机の件だろう。

「言って解決する問題じゃないと思いました。それに今の所あたしも他の方も巻き込まれず無事ですから。報告して煩わせるのもアレですし・・・大丈夫かなぁ、と」

「アレで大丈夫だと言えるのか。何かが起こってからでは遅いんだぞ」

「それは勿論です。誰かが巻き込まれるような事態になるようなら、事が起こる前に報告するつもりです。しかし、現時点ではあたしに親しい人などいないので、本当に安心して下さって良いですよ？あ、でも、篠田君だけはあたしに挨拶を返してくれるので、もしかしたら――。すみません。これからは自重します」

「お前は馬鹿か。狙われているのは自分自身だろうが・・・。他人のことを気にする必要はない。自分のことに専念しろ。お前は・・・

「有園祥子を誘き寄せるための人質なんだからな、ですか？」

にっこり笑って小首を傾げるあたしに、志月さんは口元をグッと引き結んで重々しく頷いた。その時、何か志月さんの目に過った感情があったように思えたけれど、それが何なのかは分からなかった。

「――。そうだ。お前に何かあって困るのはこちらだからな」
「気をつけます。・・・でも、あの人があたしに会いに来るなんて、本当はしない筈なんですけどね・・・」
「だが、現に今日。呼び出されているだろう」
「そうですね。何で呼び出されたか見当もつきませんが――」
「本当に思い至らないのか？」
「――どういう事ですか？」
「少し、お前のことを調べさせた」

ああ、どうも雲行きが怪しい。
自然と表情が険しくなるあたしに対して、志月さんの顔はいつも通りだ。恐らくコレが本題で、いつ切り出すかタイミングを窺っていたのだろう。成程、今は絶好の機会だ。

あーあ。易々と場所の提供なんてするんじゃなかった・・・。

「――。志月サンともあろうお方が、ちょっとお仕事が遅いんじゃありませんか？」
「そうだな。お前が天宮に来たのは父の独断で、下調べする暇もなかったからな。父は時々突拍子のないことを実行する人だ。こういう事態になって迷惑するのはいつも俺と遊月だよ――」
「あー・・・、それはそれはゴメイワクをお掛けして申し訳アリマセン」
諸悪の根源であるあたしに厭味を言っておられるのですか、志月さ

ん。あんたは嫁をいびる姑か！？

「だが、父は自分の利益にならないことはしない人でもある。“あの女”に“捨てられた”お前にどんな利用価値があるのか――それが分かれば、あの女に呼び出された理由に繋がるはずだ。さぁ、自分のことくらい分かるだろう？」

「――――」

“あの女”・・・利用価値・・・あたしは――。

『おかあさん、イラナイの？あたしはもう・・・イラナイ？』

いらない。
用済み。
邪魔。
嫌い。
ダイキライ。
憎い。
キエテ。

イラナイ、いらない。

『だれ？コノコ』

息が荒くなる。
思い出すのは、辛い。
これ以上はどうか・・・・・――。

「だんまりか」
「――――っ」
冷たい声に血の気が引いてゆく。身体が固まったまま動けない。
志月さんが眼光鋭くあたしを睨んでいる・・・あぁ、逃げられない。
「・・・有園咲禾、１９○×年生まれ。母、有園祥子。５歳のときに日野桜に拾われる。１４歳の頃に保護者である日野桜が事故死。以後日野桜の血縁者からの援助を受けながら独り暮らしを始める・・・。これだけのことしか調べられなかった。一般人なら情報を集めるのは容易い、が、お前はたったこれだけのことを調べるのに３日。しかもそれ以上の情報は詮索不可能、こんなことは有り得ない。――お前は一体何者だ？」

――事故死。
違う。
桜さんはあたしが・・・・・。
志月さんの淡々とした抑揚のない声が、あたしを容赦なく責め立てる。

沢山の“顔”が頭の中でぐるぐる回る。
待って、やめて、行かないで――。

頭が痛い。
気持ち悪い。
あぁ・・・あたしは、こんなにも弱い。

依然としてあたしを厳しく見据える志月さんに“いつものように”を意識してヘラリと笑う。
あたしの過去なんて、知っても面白くもなんともないのに、“利用

価値”なんて最初から・・・そう、初めから無いのに。
全部喋っても差し支えることなんてない。
あぁもう、簡単で良いや、簡単に纏めて喋れば良い。
人にこんなことを自分から喋るのは初めてだから、少し緊張するなぁ。がっかりするだろうな。あたしに“利用価値”がナイから。
だから、また『いらなくなる』。

苦しい、苦しい。
悲しい、痛い。
辛い、怖い。

桜さん、あたしは――。

身体が拒絶する、息が更に荒くなって喘ぐように大きく口を開けた。
ヒュッと嫌な音がして、あたしは突然呼吸ができなくなる。

「っはっぁっ――っ」
「おい！？」
焦ったような、志月さんの声。
あぁ、あたしまた迷惑掛けている。
ごめんなさい、ごめんなさい――許さなくていいから、憎んでいいから、何も望まないからもう奪わないで――奪わせないで。

なんでもする。
だから、お願い・・・お願い・・・・・。

「？」
ぼやけた視界の中で、鼻先で匂った独特の臭いに眉を寄せる。
――白色、消毒液の匂い、大嫌いな組み合わせ。最悪の目覚めだ。
「有園さん、起きた？」
「は、い。あの、ここは・・・」
「保健室よ。――んん～、まだ顔色が悪いわね。有園さん、あまり何でもかんでも溜めこんじゃ駄目よ。今日はゆっくり休みなさい」
「・・・有難うございます。でももう大丈夫ですよ」

保健室とは名ばかりで、実質的には病院の病室のようなこの空間にあたしはこれ以上居たくはなかった。だから、笑ってベッドから身を起こす。それを保健医であろう綺麗な女性は困ったように見ていたけれど知らん振りを決め込む。誤解のないように宣言するけれど、こんな美女を無視するなんて本当は嫌だ。現にあたしの繊細なハートはズキズキと痛み、今にも張り裂けそう・・・かもしれない。しかーし、いくら保健医さんが美女で、何が詰まっているのか分からない巨乳の持ち主でも、この空間に居ては具合が更に悪くなるのは確実なのだから許してほしい。

あたしの強い意思を汲み取ってくれたのか、保健医さんは苦笑しながらもハンガーに掛けてあったブレザーをそっと手渡してくれる。
「――全く、仕方ないわね」
「有難うございます」
お礼を言ってそれを受け取ると、保健医さんはベッドを外から遮断するように閉めきっていたカーテンを徐に開けた。
うふふ・・・あたしの希望的観測を見事に裏切って、カーテンを開

けたそこには、志月さんのお姿が。
あはは、何ででしょー？ただの保健室のカーテンは、そこに志月さんが居ることでゴージャスカーテンに早変わりしてしまいましたよ～。志月さんてばここまで来ると妖怪や変化の類じゃないかと勘ぐっちゃうよ？志月さんと圭司さんだけだよ、背景に薔薇が咲き誇っているのは。

「さて天宮君、貴方はいつまでここに居る気なの？有園さんは大丈夫だと言い張っているけれど？」
心なしか保健医さんの口調が刺々しいように感じられるのは、あたしの耳が可笑しくなったから？天宮家のご子息であらせられる志月さんに向かってこんな口を利けるなんて、この学園には先生も含めて皆無な筈なのに・・・。もしやネッシーよりも凄いレジェンドを生で見てしまったのか？あたしってばすげー。
どうすれば保健医さんのようにナチュラルに毒を飛ばせるのだろう？もしかすると、もしかして―――美女で巨乳、極めつけは白衣。この三種の神器を手にすれば新たなレジェンドも夢じゃないってことですか？そうなんですか？だとしたら・・・神様って惨い！！！

「そこに立っているだけじゃ何も変わらないわよ、天宮君。私、今から会議があるのだけれど、“此処”頼めるかしら？」
「・・・・・はい、俺が傍についています」
「え？ちょ―――！」
戸惑うあたしの制止の声を、保険医さんが満面の笑みでもって封殺する。あぁ・・・ここにも薔薇を背負っているお方がおられたぞぉおお！！レジェンドは伊達じゃないってことデスね？
「ふふ、良かったわね。天宮君が傍についていてくれるそうよ。――今は丁度お昼休みなの。隣の控室、鍵空けておいたから使って良いわ」

進められていく会話にレジェンドも巨乳もどうでも良くなった。
今ここで志月さんと2人きりになれば否応なしに中途半端で終わった会話の続きを促される筈だ。欲を言えば、もう少しだけ猶予が欲しかったけれど、しょうがない。

「有園さん“これ”を貴女に。もしまた体調が悪くなったり、我慢できなくなったら、このボタンを押して。すぐ駆けつけるわ。もしも、早退したいのなら担任に言ってください。有園さんの体調が悪い事は伝えてあるから、直ぐ対応してくれるわ」
本当に気遣ってくれているのが分かる。そしてこのボタンを渡してくれた理由も・・・。何だか泣きたいような気持になった。
「有難うございます」
「どういたしまして。それじゃあ、天宮君――頼んだわよ」
「はい」

控室に移動して、椅子に腰かける。
気まず過ぎる沈黙に、肩にかかる重力が増したような感覚に陥る。

「あ、あのっ！有難うございます。それからご迷惑をお掛けしたみたいで、すみません」

何とも言えない空気を振り払うように、勢い良く頭を下げたあたしに対し、志月さんは無言だ。――やっぱり相当怒っているんだろうなぁ。
空気が重い。どうすれば・・・・――
「お前が――、謝る必要はないだろう」
「し、づきさん？」

思わず俯いていた顔を上げる。
そこには、見たことのない表情をしている志月さんがいた。

「・・・悪かった」
「――え？」
「必要以上に、お前に踏み込んで追いつめた。だから、すまなかった」

律義にも、あたしと目を合わせて謝罪する志月さんは、深く頭を下げたまま動かない。

あぁ、この人は・・・・・優しいなぁ。
あたしは――あの人の娘なのに。迷惑だって一杯掛けているのに。
大嫌い以上に憎い筈のあたしに、頭を下げて謝る必要なんてないのに――。

「志月さんが謝ることなんてないです。顔、上げてください」
「？」

そう。志月さんはあたしを追いつめたと言うけれど、追いつめられていたのは志月さんの方だ。あたしはあの人へ繋がる“手掛かり”なのだ。それに今日は、半ば無理やり交わされた“約束の日”でもある。志月さんにしてみれば約束の時間までに出来得るだけ情報を手にしたいのは道理。だからあたしを追及するのも至極最もな判断で、約束の時間まで余裕など一切ない今、志月さんが焦るのは当然だと思うのだ。

「あたしは――志月さんがどれほどの想いで“あの人”を探しているのか知らないし、分かりません。でも、それが生半可なものでないことは見ていて感じることは出来ます。志月さんは自分のやるべ

き事を精一杯やっているだけでしょう？――――だから、他人を気にする必要はない。自分の事に専念しろ・・・・ってことだと思います。コレ、受け売りですけど」

「それは俺の台詞だろうが・・・」

「あれ。怒っちゃいました？」

「――違う」

何とも言えない表情をしている志月さんが何を思っているのか分からないが、なんだか前よりは話しやすい雰囲気がある。いつもの威圧感がないことで、あたしはほっと息をつくことが出来た。

ゆったりとした空気の中で、志月さんが視線をさ迷わせたかと思うと、その目はあたしを映した。

「過去を、思い出すのは辛いか・・・？」

らしくない。迷ったように吐きだされた質問に、あたしは目を瞬く。こんな風に、志月さんと・・・そしてこの質問と向き合うとは思っていなかった。

「――辛いですよ。でも、辛いだけじゃ有りません。志月さんが思うようなお話ではないかも知れませんが・・・、それでも構わないなら・・・」

最後まで言いたいのに、喉が詰まって声が出ない。

ちゃんと、志月さんに話さなきゃいけないのに。どうして、なんで？身体が強張るの？

焦るあたしの肩に、志月さんの大きな手が添えられる。

「もう良い」

「――――え？」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4206c/

ジグザグ

2010年10月25日02時11分発行